

3. 大野晋博士の所謂「日本語＝タミル語同系説」に寄せて

——一タミル学徒の雑感

山下博司

I. はじめに

1. これまでの「日本語＝タミル語同系説」をめぐるダイアローグの総括

大野晋博士（以下、大野氏と略させて頂く）は、ここ15年ほどにわたって、日本語の成立論をドラヴィダ諸語との関連から精力的に展開されてきた。氏の該博な国語学の知識と見識を駆使しての日本語の来歴をめぐる学問的探求の営みは、我々研究者一同に対して、一つの範を垂れるものであることは間違いない。しかし一方、不幸なことに、氏の議論は、少なくとも日本のインド研究者たち——歴史学者、言語学者、インド学者（古典文献学者）をはじめとする専門家たち——のそれと、必ずしも噛み合って来なかったように見える。氏の研究を推進する原動力ともなってきたであろう不屈の闘志、日本語の起源をつきとめようとする類無い情熱、ことの真相を見極めんとするひたむきな情念にも拘らず、自己の所説に対する揺るぎない信念がむしろ災いしてか、インドを専門分野とする者たちとの論争の場で双方の議論が噛み合わず、結果的に争点がすり替わって、議論全体の方向性がミスリードされる嫌いがあったように見受けられる。もちろん、そのような事態を招来するにあたっては、インド研究者の側にも、反省すべき点が多々あったことは否めない。

これには、いくつかの原因が考えられる。氏の議論は、言語史や比較言語学・歴史言語学の領域をいつしか踏み越え、日本と南インド・タミルナードゥとの間の、太古の文化交流や民族移動の問題にまで及び、民俗学や先史考古学の分野をも巻き込む大がかりなものとなってしまう。本来日本語の形成をめぐる言語学的議論であったはずのものが、ややもすると、日本の文化や民族のルーツを求める議論に陥ってしまいがちなのは、『日本語の起源』の冒頭で披瀝された氏の積年の基本的問題意識からして、ある意味で当然のことであり、問題の性質上、避け難いではあろう。己のルーツに異常な関心を示す日本人の性向から推して、読書界受けすることも間違いない。

これに対して、インド研究者の側は、この種の問題に対処するに当たっての自らの方法論的限界をわきまえつつ、問題をインドの文脈に局限し、日本語や日本文化の起源をめぐる論争の展開に踏み入ることを注意深く回避してきた傾きがある。この背景には、専門分野がかなりの程度細分化され、個別の研究領域を越えて議論すべき力量・方法論的準備を欠くという今日の学界一般がかかえる事情に、インド研究者たちも免れていないという状況があることも否定できない。さらに、氏の議論が常識——少なくともインド研究者間の常識——に馴染まないという冷淡で突き放した態度に加え、インド研究の各々個別的な専門分野の文脈から難点を指摘することによって、大野説の批判は十分に可能であるという楽観的な確信に立脚していることも事実であろう。何より、問題の紛糾を避け、自らの専門知識の内に議論の枠組みをとどめておくよう努めるのは、いわば研究者の習癖であり、各々個別の学問を志す学徒一般の立場からして、至って当然の態度と言えなくもない。

こうした、両者間にみられるアプローチやパースペクティブの差異、問題意識の基本的な相違——少なくとも、日本の南インドないしタミル研究者の中には、自らの専門分野を日本語・日本文化の起源を解く鍵として位置づけている者は、まず一人もあるまい——、対処の仕方の根本的なズレこそが、議論の方向性を時に誤らせ、本来の学問的論争を空転させ、事態をかえって紛糾させて、真の問題の所在を研究者や一般読者の目からくらませることに寄与しているのではなからうか。要するに、建設的な議論を可能にする共通の「土俵」を用意するための歩み寄りが、双方の側から真剣に為されてこなかったことに、問題が集約されているように思われるのである。

このような意味で、長田俊樹氏の出現と議論への参画は、この論争にとっての大きいなる福音である。氏は、何より言語学者であり、言語理論のほか民族言語学 (ethnolinguistics) の方面にも明るく、日本語とインド諸言語の両方の事情にも通じている。氏の特に専門とするところは、オーストロ・アジア諸語、とりわけ中央インド・チョターナグプル高原のムンダ系諸言語である。それはインド・アーリア語族でもドラヴィダ語族でもなく、しかも両者との歴史的交渉が極めて注目されている言語群であって、系統の点で東南アジア世界などとも連続する側面をもつ。さらに氏は、インドの稲作文化や、日本文化との関連がしばしば取り沙汰される所謂「照葉樹林文化」の話題にも関心を示され、かつ大野氏の日本語＝タミル語同系説で引き合いに出されることの多い農業や農耕文化の問題にも造詣が深い⁽¹⁾。このようなバックグラウンドをもつ長田氏は、真に第三者的な立場から議論全体を俯瞰することのできる、現時点で求め得る最良の人材であることに間違いない。氏の加入により、積年の論争が止揚され、双方の側にとって互酬的かつ建設的な方向に軌道修正が図られることを切に期待したいと思う。

さて、これまでの学問的やりとりが必ずしも稔り多いものでなかった具体的な理由の一つに、ドラヴィダ言語学からの議論への参入が不十分であったことも挙げられよう。これは論争にとって致命的な欠陥だったことは言うまでもない。それは、もっぱら大野氏と理論的に渡り合うことのできるドラヴィダ言語学者が日本に未だ育っていなかったという事情によるものだが、日本におけるドラヴィダ研究全体の深化と裾野の広がりを承け、ようやく近年になって、本格的なドラヴィダ語学者の輩出を見るに至っている。児玉望氏と家本太郎氏の出現がそれである。個別のドラヴィダ諸語の知識とドラヴィダ比較言語学の最新の研究成果を踏まえた両氏の参画で、本来の言語学的立場から議論を本格化させるための舞台が設定され、解決に一つの見通しと示唆が与えられることが待望される。

それにしても残念かつ不幸に思われるのは、日本語や日本文化の来歴という壮大なテーマをめぐる一つのセンセーショナルな学問的論争の場であるにも拘らず、大野氏の側から、氏の立場に賛同し、積極的に擁護し、或いは説の強化を援けるような日本人研究者が未だ現れず、氏が一連の論争の過程で常に孤軍奮闘し、ややもすれば孤立をかこっているような印象をすら与えていることである。この論争を本来あるべき正しい軌道に乗せ、稔りある学問的成果へと導くためにも、自らの方法論の効力と限界とを同時にわきまえた多くの研究者の参入と、ディシプリンを互いに異にするさまざまな学問分野からの冷静かつ客観的な提言を期

待したいものである。

2. 筆者のスタンスについて

さて、ここで当該の問題について材料を提供するに当たって、筆者の立脚する立場、スタンスについて一言申し述べておきたい。筆者は言語学者ではない。本来サンスクリット語、パーリ語、チベット語、漢語文献などの資料を用いてインド思想や仏教史の勉強をしてきた学徒の一人に過ぎない。まったくの偶然ではあるが、その後研究上の必要性から大野氏とはほぼ同じ時期にタミル語を始め、さらに6年間南インドに留学してタミル古典文献の研究に勤しんだ。最近では、やはりドラヴィダ諸語の一つであるマラヤーラム語の学習にも着手している。私の主要な関心事は、言語現象そのものではなく、むしろ文字資料から知られる南インドの宗教文化の方面である。大野氏には、第五回タミル学会（1981年、マドゥライ市で開催）やマドラス大学留学中のお姿に接し、その真摯な学問的探求の姿勢に心打たれた者の一人であることを申し添えておきたい。

日本語とタミル語をめぐる一連の論争については、ここ15年来、タミル語の古典文献や現代語資料を扱う者の立場から、相応の関心を払ってきた。筆者は、先にお断りしたように、厳密な比較言語学・歴史言語学の手法はもとより、日本語史やドラヴィダ語学に対する方法論も専門知識も欠いている。言語学理論の面で大野氏の所説の当否を査定する立場にはないし、論駁する力量も持ち合わせていない。何より、純粹かつ高度な言語学的な論点については、本書に掲載された児玉氏及び家本氏のものであらかた尽くされていることでもあろう。筆者の場合、あくまでも、必要に迫られて、時にタミル語を読み、書き、話す者としての立場から、気がついたこと、素朴な疑問点などを中心に記させて頂きたいと思う。言語学者からはいかにも稚拙または見当違いに映り、或いは敢えなく筆者の言語理論上の無知をさらけ出すことになるかもしれないが、その点はよろしくご寛恕を請いたい。この論争において、私に発言の機会が許されるとすれば、非言語学者であり、一介の「タミル語読み」に過ぎない者の資格においてに他ならないと信ずるからである。

上の事情から、言語の本質的構造に踏み込んだ議論は他の諸先生に譲り、文学史・文献史の観点も踏まえた語彙論・意味論的な方面を中心とした問題提起にならざるを得ないことを、予めお断りしておきたい。個々の用例についても、紙幅の関係から、逐一文脈を提示しつつ議論を進めるのが困難であるので、この点もご了承願いたい。また、今回のシンポジウムの趣旨に沿い、古代日本とタミルナードゥの文化的な関わりや歴史学・考古学的な問題については、筆者の手に余ることでもあり、できるだけ論及を控えることにする。また、インドの農耕文化、特に米作と東南アジア・東アジア世界との関わりについては、前出の長田俊樹氏⁽²⁾が、民族言語学的手法を駆使して詳細な考察を加えているので、そちらを参照されたい。従って、ここでは、大野晋著『日本語の起源 新版』（岩波書店、1994年）の前半部分（1～79頁）と末尾に添付された「日本語とタミル語の対応語一覧」（20頁）、及び同著『日本語以前』（岩波書店、1987年）の53頁以下が、第一義的な考察の対象となるであろう。氏のその他の論考については、必要な場合そのつと言及しておいた。

3. 日本語とタミル語の「感覚的類似」の事実について

現代タミル語の運用——読み、書き、聴き、話す作業——に一通り慣れてみると、我々日本人にとって、タミル語が、「言語そのもの」としてかなり親しみやすいという感想を抱くのではあるまいか。日本語がその語彙を多く借用しているにもかかわらず、何となく違和感をぬぐえない英語など西洋語に対する場合とは対照的である。日本語とタミル語の間に、親近感を覚えさせるような一致点・類似点が多いことは間違いない。何よりも語順がほぼ等しい。原則的には、日本語で発想する順序に、素直にタミル語の単語を並べていきさえすれば、それでよい。⁽³⁾ 名詞の曲用や動詞の活用の仕方といった形態論的側面に関しても、日本語と軌を一にする面が大きい。この種の親近感（統語的な特徴の大きな差異にもかかわらず）、我々が高校ではじめて漢文を習ったときに、それとなく感じるものにも似通っている。筆者が現代中国語（北京官話）を学習した折にも同種の感覚を禁じ得なかったし、チベット語——形容詞的要素（修飾語・修飾句）が後置されること等を除いて語順が日本語とほぼ等しい——を修得した際には、一層その感を深くしたものである。恐らく朝鮮語等についても、同様の感想を抱くことであろう。こうした感覚は、ひとえに、非ヨーロッパの言語として、何気なく発想法や表現の仕方（場合によっては語順まで）が並行していることに対する新鮮な驚きにも発するものであろう。しかも、タミル語の場合、漢文・中国語やチベット語などにも増して、この種の「感覚的一致感」ないし「親しみやすさ」「親近感」が大きいように感じられることは、紛れもない事実である。起源的な関係（genetic relationship）を仮設したくなるのも、無理からぬところであろう。

ところが、一旦我々が古典語の世界に足を踏み入れてみると、一転してその期待は裏切られる。しかも、文献が古くなればそれだけ、いよいよ日本語から遠のいていくようにすら感じられるのである。大野氏の所説に従えば、日本語とタミル語は、古い時代になればなるほど接近し類似の度を増して然るべきである。ところが実際は、むしろ遡れば遡るほど、日本語的な感覚からは段々と遠ざかっていくような印象をすら覚える。もちろん、これは双方の古典語同士を厳密かつ客観的・学問的に比較・対照した結果ではない。あくまでも、現代日本語の話者である我々が、古典タミル語に接した場合の感覚に過ぎない。現代タミルを操っているときと打って変わって、古代のタミル語に対しては、大きな違和感を禁じ得ないということである。これは、我々現代日本人が『万葉集』や『古事記』などに接したときに感じる難解な印象とも、若干異質なもののように思われるのである。

先に、タミル語は日本人にとって話し易い言語である、感覚的に親近感を覚える言葉であるという趣旨を述べた。しかし、実のところ、ヒンディー語、ベンガリー語、マラーティー語、パンジャービー語など、いわゆる「近代（現代）インド・アーリヤ諸語」についても、学習者はほとんど同様の感懐を抱くのではあるまいか。形態や語彙に関して印欧語の特徴をとどめながらも、近代インド・アーリヤ諸語も、日本語と近似した統語構造をしているのである。筆者は先頃、国立民族学博物館の依頼で、インド亜大陸に分布する多数の言語について対照言語学的な基礎資料を採集する機会に恵まれた。インド地域に分布する多くの言語が（——インド・アーリヤ諸語、ドラヴィダ系の大言語、オーストロ・アジア諸語等、語族や

語派の如何を問わず、しかもクールグ語、オラオン語（クルク語）、バダグ語、サントル語など数々の部族言語に至るまで——）、語順を含め、類似した統語的概観を呈する事実を再認識することができた。これらが、もともとこのような形式を有していたのか、共通の基層言語に由来するのか、互いの影響関係を経て獲得したのか、各言語の内発的發展の所産なのか、筆者には容易に判断できない。フランス東洋語学院（l'École des Langues Orientales）の Pierre Meile 教授は次のように述べている——「（インドには）アールヤ語、ムンダ語、ドラヴィダ語があるけれども、しかし言語のインド的な一つの型がある。この型を仕上げるのにこれらの言語族のなした役割についてはわかっていないし、これから長くわからないであろう。この事実の最終的説明はすべてを条件づける遙かな基層語かまたは生物学的近似現象であろう⁽⁴⁾」。生物学的近似現象云々の当否はともかくとして、要するに、原因は定かでないものの、インドの諸言語はほぼ統一的な類型を示す傾向があるということになろう。ドラヴィダ諸語に通用する事実が、必ずしもドラヴィダ語に固有の性質ではなく、かなり汎インド的の広がりをもっていることも多いのである。Meile 教授はさらに付け加えている——「同化、融合、徐々に統一、いつも未完結な統合などが風俗、信仰でも言語でもインド的發展の主な法則である」⁽⁵⁾。インドの言語現象を扱うに当たっては、特定の一言語の領分を超えたインド諸語の幅広い知識と洞察力を以て、言語相互間の比較対照を常に踏まえながら進めることが肝要であることがわかる。ドラヴィダの祖語形に無頓着を決め込み、またドラヴィダ語族と印欧語との何千年にも渡る交渉の歴史にも応分の注意を払わぬまま、直ちにタミル語と日本語の問題に局限して論ずることの危険性は、自ずから明らかであろう。

さてそれでは、以下に、原典の事例に即し、注釈文献やレキシカルな資料も適宜参酌しながら、大野氏の所説の正否を筆者なりに見極めるための具体的な作業に移ることにしよう。

なお、以下の吟味に当たっては、著書の頁数などの言及に際し、大野晋著『日本語の起源新版』を『起源』、同著『日本語以前』を『以前』と略記することとする。また、T. Burrow と M. B. Emeneau の *Dravidian Etymological Dictionary* (Oxford University Press, 1960) 及びその改訂版 (second edition) (Oxford University Press, 1984) を、それぞれ *DED*、*DEDR* と表記する。

II. 助詞の対応に関する問題

まず、『起源』57頁に掲載されている日本語の助詞・助動詞とタミル語の相当語の対応表に沿い、若干の疑問を提起することにしたい。なお、同種の問題は『以前』246頁以下にも詳説されており、必要に応じてそちらも参照することにする。（上の表は『起源』57頁、下の表は『以前』249頁のもの）

	日本語	助 詞	タミル語
①	Fa	(は)	vāy
	ka	(か)	kol
	zō < sō	(ぞ)	tān

②	kara	(から)	kāl
③	nō	(の)	in
	ni	(に)	in
	mō	(も)	um
	tō	(と)	oṭu
	tu	(つ)	atu
④	ga	(が)	akam
	ya	(や)	ya > ē
	te	(て)	tu

助詞使用数	8世紀の語形	タミル語の小辞
の (19539)	nō	in
に (13869)	ni	in
も (12090)	mō	um
て (10917)	te	tu
を (9839)	(wo)	(ai)
と (9837)	tō	oṭu
は (8971)	Fa	vāy
ば (5442)	(ba)	—
や (2111)	ya	*ya > ē
が (1228)	ga	akam, aka
か (733)	ka	kō, kol
つ (8世紀の古語)	tu	attu, atu

(i) “vāy”

第一に、大野氏が日本語の係助詞「は」(Fa)に対応するものとして掲げる“vāy”であるが、これは本来「口」「穴」(orifice)等を表す名詞であり⁽⁶⁾ (DEDR 5352)、それが転じて、或いは(“in”、“on”の意の)空間の locative を表し、或いは比較を示す助辞になったもの⁽⁷⁾と考えられる。この語が名詞起源であろうことは、常に nominal もしくは adjectival participle に付くことから間接的に窺うことができる。従って、“vāy”と日本語の係助詞「は」⁽⁸⁾との(統語的ではなく)起源的な対応関係を主張するためには、日本語「は」も同じように「口」「穴」に相応する原義をもった自立語であることを証明する必要がある。『起源』の本文中では、この点について特別の説明は施されていないが、巻末の対応語彙表の15頁をよく見ると、タミルの名詞“vāy”に対応する日本語の名詞として“Fa”(=刃、端、葉、言葉)が掲げられているのがわかる。さらに、それより遡る『以前』(169~170、262、275~278頁)では、「は」と“vāy”の対応が取り上げられ、“vāy”の名詞起源について明らかな指摘が為されている。そうだとすれば、日本語の助詞「は」と名詞「は」(Fa)とは同根であり、

ともにタミル “vāy” (=口、穴) に語源的に結びつくということになる。確かに、それぞれ「はかり」、「たけ」に由来する「ばかり」や「だけ」のように、日本語中には名詞に由来する助詞（この場合副助詞）が存在するから、あながち誤りとは言えないのかもしれない。⁽⁹⁾しかし、タミルの “vāy” には、（名詞の用例はおびただしいものの）この例のような助辞的な役割は目立たず、日本の古典に頻出する重要助詞である「は」⁽¹⁰⁾に対応させるのは、いかにも不自然に思われる。また、日本語の係助詞「は」を特徴づける“提題の機能”（その承ける語を話題として提示し、下に、それについての明確な解決や説明を求める役割）が、タミル語の case marker である “vāy” には見られないのも気になるところである。

以下に、大野氏が『以前』276～278頁に掲げる “vāy” の諸文例のうち、代表して3つ目までのものについて、その内容を順次検証してみることにしよう。氏によるローマナイズ及び訳文の直下に筆者の試訳を併せ掲げておくので、比較対照されたい。

	taṭavu	vāy	kalitta	mā	itaṛ	kuvaḷai	(Puram. 105)
[大野]	大キイモノ	△	茂ッタ	黒イ	花ビラノ	花〔デアル〕	
[山下]	大キイ(池)	△	茂ッタ	黒イ	花ビラノ	青蓮華〔ノ〕	

私の訳例において、“vāy” が、「は」のような nominative ではなく、locative の用法を示していることがおわかりであろう。⁽¹¹⁾ *Tamil Lexicon* (p. 1726) は、この *Purāṇanūru* 105 の “taṭavuvāy” そのものを見出し語に掲げ、“mountain pool” という定義を与えている。この解釈によれば、二語を複合語（合成語）ととり、名詞相当語と見做していることになる。いずれの場合でも、“vāy” は、大野氏の主張するような“提題の助詞”「は」の用法とは懸け離れている。

次に掲げる第2の例（『以前』276頁）においても、大野氏は、やはり日本語「は」との対応を意識した訳語を与えているが、その解釈も甚だ疑問である。⁽¹²⁾

	naṛavu	vāy	uraikkum ⁽¹³⁾	nāku
[大野]	蜜	△	シタタッテイル	柔ラカク
[山下]	蜜ヲ	□ニ〔=花卉から〕	滴タラセテイル	若サノ〔=幼木から成木に〕

	mutir	nuṇavam	(Cīrupāṇ. 51)
[大野]	成熟シタ	樹カラ	
[山下]	生長シタ	ヌナヴァム (=桑の 一種)ノ樹〔ノ〕	

第3番目に掲げられた用例（『以前』276頁）を吟味しよう。⁽¹⁴⁾

	pukai	vāy	vāy	mī	pōy	umpar
[大野]	煙ノ	先端	△	高ク	ノボッテ、	天ノ人々ハ

[山下] 煙ガ トコロ ドコロデ 立ち昇ルト、 神々ハ

imaipu irappa (Pari. 17)⁽¹⁵⁾

[大野] チョット 目ヲシバタタイタ〔煙クテ〕

[山下] マバタキラシテ 死ニ〔または退散シ〕

これは、狭義のサンガム文学からやや時代の降った *Paripāṭal* という宗教的色彩の濃い作品からの引用である。問題の第17章は、セッヴェール (Cevvēl) 神、すなわちムルガンを讃える一連の長詩の一つである。文脈を知って頂くため、前後の部分を含めて本文 (Pari. 7. 29-32) を逐語的に訳出してみよう。

四方の山に座し、その場所その場所で (ムルガンが) 香りを楽しむところの、香木の芳しい煙が、場所場所で立ち昇ると、神々もまばたきして死に、欠けることなき輪 (たる日輪) も、(立ち昇る煙で) 霞んで見えない。

最後の “irappa” に対して、フランスのインド学者 F. Gros は、「四散する」(s’ écartent) とするが、“vāyvāy” については、やはり「ところどころ」(de place en place) と、大注釈家 Parimēlaḷakar (14世紀) 以来の伝統的解釈を踏襲している。⁽¹⁶⁾

この部分に関する Parimēlaḷakar の注釈の直訳文を、参考までに下に掲げることにする。⁽¹⁷⁾

誉れを以て、至るところに広がれる山に満たし、世間の人々が多くの場所で行なうプージャー (= 供養) において、ムルガンが香として嗅ぐところの香木の煙が、その場所その場所で上に昇ることによって、(普段はまばたきをしない) 神々が (煙のゆえに) まばたきして離れ去る。太陽の輪もその場所では目に見える有り様ではない。

趣意がややとりにくいが、要するに、ムルガン神を礼拝するための香木の煙が盛大に上空に立ち昇ることによって、天の神々も煙たがり、立ち退いてしまうほどだ、という趣旨である。問題の “vāyvāy” という表現が、大野氏の言うような「先端ハ」という意味でないことは、この句が2行前の “āṇṭāṇṭu” (= āṇṭu + āṇṭu) (*Tamil Lexicon*, p. 221: “āṇṭu” = that place) と呼応しており、いずれも「場所場所」を意味することからも窺われる。

このように、格語尾としての “vāy” に、(日本語「は」のように) 主格語尾的な役割ないし“提題の機能”を認めることは困難であることがわかるのである。

(ii) “tāṇ”

次に前掲の表中の “tāṇ” についても同様の疑問が生じる。これは、氏によって日本語の「ぞ」(zō < sō) に対応するものとされているが、そもそもタミル語の “tāṇ” は、再帰的な機能をもつ代名詞が、強調の助辞として転用されたものと見るべきであろう。日本語の「ぞ」

と、果たして起源的に関連するものであろうか。⁽¹⁸⁾

(iii) “kāl”

日本語の格助詞「から」(kara) とタミル語 “kāl” をめぐる問題であるが、これについては、大野氏が『起源』54頁で詳細に論じている。⁽¹⁹⁾

そもそも、この「から」の語については、先に大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』(岩波書店、1974年)の中で、次のように語源解説が与えられていた——「から【族・柄】《満州語・蒙古語の kala, xala (族) と同系の語。上代語では「はらから」「やから」など複合した例が多いが、血筋・素性という意味から発して、抽象的に出発点・成行き・原因などの意味にまで広がって用いられる。助詞カラもこの語の転。→からに》」。さらに、同じ見出し語の解説の結びに当たって、「▷この語は現在も満州族・蒙古族では社会生活上の重要な概念であるが、日本の古代社会には、ウヂ(氏)よりも一層古く入ったらしく、奈良時代以後、ウヂほどには社会組織の上で重要な役割を果たしていない。なお、朝鮮語では kyöröi (族) の形になっている」という懇切な説明が施されている。また、この「から」の関連語「からに」の項の語源解説でも、「《血族・血筋の意から自然の成行きの意へと発展したカラと格助詞ニとの複合。……》」⁽²¹⁾という解釈が繰り返し提示されている。

大野氏は、日本語「から」をめぐる蒙古語・満州語からの語源解釈を、かなりの確信をもって主張していたように見える。或いは少なくとも、重要視していたことは間違いないまい。『岩波古語辞典』では、原則として助詞は巻末で解説が施されているにもかかわらず、この「から」については、敢えて本文中でも取り上げ、上記のような懇切丁寧な語源解説が披露されているからである。

大野氏は、日本語＝タミル語同系説を唱えるに当たって、こうした20年来の見解——すなわち、名詞「から(族・柄)」及びそれに由来する助詞「から」を満州語・蒙古語起源とする考え——を敢えて撤回し、タミル語による新解釈を我々に提起していることになる。大野氏によると、日本語「から」とタミル語 “kāl” とは、役割のみならず、その語源においても密接な連関を有するのだという。

このように大野氏は、日本語「から」をアルタイ諸語から解釈する従前の自説を覆し、今やタミル語にその起源的關係を設定する立場に変わったわけであるが、考え方の筋道自体は一定である。すなわち、「親族」「血筋」を原義とする名詞が、起点などを表す格助詞に転化したというものである。アルタイ語族からの説明を破棄するに当たっては、蒙古語・満州語 “kala” “xala” に代わって、タミル語の “kāl” がその役割を担わされることになった。そのためには、タミル “kāl” にも「親族」「血筋」の意味がなければならない。実際、『起源』の巻末に掲げられた対応語一覧表の3頁には、日本語 “kara” (=族) の対応語として挙げられたタミル “kāl” に「親族」という唯一の語義が与えられている。恐らく、DEDR 1479にある “kāl” の意味記述の中にある “family, relationship” という義に目をつけ、「親族」という日本語で示したのであろう。しかしながら、この語義を無条件に受け入れることはできない。なぜなら、“kāl” の語にとって、“family, relationship” の義は、ほとんど重要性をもたないからである。DEDR の記載内容に照らす限りにおいて、“kāl” ないしそのドラヴィダ語

の cognates は、「足」もしくは「四分の一」(quarter) を基本義とし、「親族」などの意味をもつのは、ドラヴィダ諸語のうちでもタミル語とトード語 (南インド・ニールギリ高地の部族言語) のみに限定される。*Tamil Lexicon* (p. 890) でも、ようやく第18義に“family, relationship”を掲げるにとどまり、しかも典拠がまったく挙げられていないのである。のちに IV のところで詳述するが、*Tamil Lexicon* の語義解説中で用例ないし典拠が与えられていないものは、文献中にはまず現れないか、使用の極めて稀な語ないし語義である。現に、Winslow⁽²²⁾の辞書にも、S. Visvanatha Pillai⁽²³⁾の辞典中にも、Mousset と Dupuis のタミル語 = フランス語辞典⁽²⁴⁾にも、或いは他の現代タミル語の辞典類のどれをとってみても、“kāḷ”の項目中に“family, relationship”またはそれに類する語義は一切記載されていない。このような理由から、対応語表 3 頁にある日本語「から」とタミル“kāḷ”との対応関係は、論拠に説得力を欠くものと見なさざるを得ない。

もっとも、大野氏の最近の主張のように、日本でそれ以前に行われていた何らかの言語 (基層言語、substratum)——氏の言うところの「ポリネシア語族の一つに近い音韻組織をもっていた何らかの言語」(『起源』217頁)——の上にタミル語が覆いかぶさったのだと仮定した場合、語の来歴 (本来の品詞や語義) はどうあれ、語法そのものが日本語に移植されたのだと考えれば、上に指摘したような問題は第一義的な重要性をもたないことになるのかもしれない。⁽²⁵⁾ただし、その場合でも、肝心の語の用法に関して、タミルの“kāḷ”と日本語「から」は、大きな齟齬を見せるのである。そのことを次に示すことにしたい。

助辞ないし case marker としての“kāḷ”の語に関して、*Tamil Lexicon* (p. 890) では、以下のような説明が与えられている。添えられているタミル語の例文を省いて、ここに掲げることにする。

1. a locative ending.
2. ending of verbal participle meaning if, provided, while, when.
3. a prefix meaning in, at, about, in the vicinity of.

3 は接頭辞としての用法であるから考察から除外し、1 と 2 の定義に照らすと、“kāḷ”は、日本語の「から」のように、もっぱら起点 (あるいは経過点、手段、材料、理由など) を表すものというより、より広く locative の意味で用いられる助辞であることが推定される。実際、V. S. Rajam⁽²⁶⁾の研究を参照すると、“kāḷ”は、“kālai”とほぼ同じように、空間の locative (at, in)、時間の locative (at, times) として用いられることがわかる。同研究には、“kāḷ”について、locative としての規定と並んで local ablative という記述も見られるものの、⁽²⁷⁾いわゆる「から」(from) よりは使用範囲がかなり広く、locative 的な性格 (in, at, about, in the vicinity of) が卓越していると思ふべきであろう。さて、『起源』54頁で例示されているタミル文を検討すると、氏が「から」の意をもつとして指摘している“kāḷ”が、真にその意味を表すか否かについて、確証を求め難いという点を指摘したい。これは、古代タミル文献の解釈につきまとう不可避的な問題点と関係している。

次に、『起源』54頁に掲げられたタミル語の原文と、大野氏が与えた訳文とをそのまま以下に示そう。

punal	<u>kāl</u>	ayir	iṭu	kuppai	(Akam. 163)
川	<u>カラ</u>	砂ガ	寄ル	丘	

Ek	<u>kāl</u>	varu	vatu	(Kuru. 277)
ドコ	<u>カラ</u>	来ル	ソノ人ハ	

古典の解釈の場合、原文 (mūlam) のみから趣旨を正確に汲み取ることは、かなり至難の技であり、我々は中世や現代の注釈家たちによる注 (urai) の助けを借りながら読み進めるのが習いである。特に、いわゆる「サンガム文献」など、時代のかかなり遡るものを読む際はなおさらで、原義の把握に、ほとんど解読にも似た作業を強いられることになる。問題の語が、名詞なのか動詞なのか、或いは形容詞なのか、品詞の区別すら定め難いことも稀ではない。⁽²⁸⁾ そのような場合、注釈家——時には複数に及ぶ——の判断を批判的に参照しながら、妥当な訳語・訳文を確定していくことになる。上の二つの例文の場合も、解釈の作業は必ずしも容易でない。仮に氏の読みが可能であるとしても、それと別様の理解も同程度（またはそれ以上）に蓋然性をもつのである。例えば、はじめの例文について言えば、現代のタミル学者 S. V. Subramanian が著したインデックスによると、“punal kāl” の二語で “channel”⁽³⁰⁾（水路）と解され、ここでの “kāl” が、助辞ではなく “irrigation channel, streamlet” を表す普通名詞と見なされていることがわかる。現代の注釈家 Puliyūr Kēcikan も、二語で “kāl vāy (kaḷ)”⁽³¹⁾、すなわち “channel” ととっている。現代の注釈家 Po. Vē. Cōmacuntaraṇār (1909-1972) は、上の一節を「水によって水路に砂が積もった盛り上がり」(nirāl vāy k-kālīṅkaṇ maṇaliṭṭa kuviyal)、ないし「水によって底（または水路）に細かい砂が積もった盛り上がり」(punalāl kālil ayiriṭukuppai) と解説し、“kāl” をやはり名詞ととっていることがわ⁽³³⁾かる。

第二の文例について言えば、硯学 U. Vē. Cāminātaiyar (1855-1942) は「いつ（＝どの時）来るのか」(eppolūtu varuvatu)⁽³⁴⁾ と解し、著名なタミル学者 Mu. Caṇmukam Piḷḷai (1919-) も、「いつ来るのか」(eppolūtu varuvatu)⁽³⁵⁾ としており、注釈家の間で解釈がほぼ一致していることが明らかとなる。すなわち、助詞「から」に対応するどころか、「とき」の意の名詞（もしくは副詞）として一般に把握されていることになる。或いは、二語が連結した “ekkāl” で「いつ」という疑問副詞的な連語とすることも可能である。いずれにせよ、大野氏の解釈には奇異な感が否めない。

ところで、前掲 *Tamil Lexicon* 中、“kāl” の第2義として掲げられた語義 (if, provided, while, when) から推して、“kāl” の語のサンスクリット起源の問題が浮上せざるを得ない。“kāl” とほぼ同じように用いられるタミル語の “kālai” に関して、*Tamil Lexicon* (p. 900) は、サンスクリット “kāla” からの派生を明示している。DEDR にも、「時間」(名詞) 及び

「～する時」(後置辞)の意のタミル語“kāl”ないし“kālai”について記載が見られず、サンスクリット起源と見ていることが類推される。これらのことから、タミル“kāl”の考察に当たっては、タミル“kālai”と同根の可能性、さらに、それらがサンスクリットの名詞“kāla”と語源的に関連している可能性を念頭に入れて然るべきであろう。大野氏は、こうした問題点を十二分にわきまえ、論理的に解決を図った上で、“kāl”と「から」を比較の対象に選んでいるのであろうか。疑念を禁じ得ない。⁽³⁶⁾

そもそも、ドラヴィダ語において、日本語の「から」にも相当するような独立した ablative という格 (case) ないし case marker が本来存在したのかどうか、言語学的にも問題になるところではあろう。⁽³⁷⁾

(iv) “in”

さて、やはりこの表で、「の」(nō)、「に」(ni) に対応するものとして掲げられたタミル語“in”についてである。“in”は、古典タミル語においては、genitive、accusative、instrumental、associative、locative、ablative、comparative、distributive、directional 等の case marker として用いられる。⁽³⁸⁾日本語の「の」「に」も、タミル語の“in”も、ともに古代語では現在より遥かに広い用途で使われており、ズレは否めないものの、大野氏の指摘のように、用法において或る程度の並行現象が観察されることは確かである(『以前』256～259、266～270頁)。より正確には、タミル語の“in”が、日本語の「の」と「に」の両方の意味範疇をカバーしていると言ったほうがよいであろう。これを大野氏は、タミル“in”(名詞にも動詞にも連なる)一語を日本語の「の」(体言に連なる)と「に」(動詞に連なる)の二語と対応させるという形で解決を図ろうとしたものと思われる。

そもそも、タミル語の格語尾は、特に dative, locative 等に関して、文脈によって体言に連なったり、或いは用言に連なったり、用法にかなり自由な側面がある。“in”も例外ではない。問題は、タミル語の“in”が、日本語で「の」と「に」に分かれて現れることの根拠(『以前』257～258、278)である。氏は、これを説明するのに、タミル語“um”(後述)が、日本語の助詞「も」(mō)と助動詞「む」(mu)という二語に語源的に対応しているという唯一の類例を掲げるにとどまっている。しかし、これは証明済みの事項ではまったくないし、また、“in”が基本的に case suffix であるのに対し、“um”の場合、それとは大いに性格を異にする connecting particle としての用法が卓越している。⁽³⁹⁾両者は範疇を異にする語と考えるべきである。このことから“in”<「の」「に」>を例証するただ一つの類例として提示するには、説得力に乏しいものと言わざるを得ない。よりの確な範例を数多く示しつつ、論証してもらいたいものである。

(v) “um”

次に、上述のこととも関連するが、助詞「も」(mō)に当たるとされたタミル語の分詞“um”について検討を加えよう。大野氏は、自らが日本語とタミル語の間に音韻の対応関係に基づく対応語彙集を構築し得たことを指摘した上で、次のように述べている——「[……]しかし言語の同系性を考える上で重要なのは文法である。だから日本語とタミル語の文法比較のお話をしなければならない」(『起源』44頁)。こうした前置きのもとに、氏は、タミル

語の文法と日本語の文法が対応していることの好例として、“um”の問題を大きく取り上げている(『起源』45～50頁、『以前』278～282頁)。

氏の議論の要点は、語法において、“um”は日本語の「も」と軌を一にする点が極めて多いということであろう。例えば、「um+…ā(否定詞)+kol(疑問詞)」と「も+…ぬ(否定詞)+か(疑問詞)」の対応、「anru(否定詞)+ē(強意)」と「ず(否定詞)+や(韻律を整えるための助詞)」がともに反語の意を表すこと、「AとB」を表す日本語の「…も…も」とタミル語「…um…um」の用法の一致、「疑問詞+um」が「すべての…」の意味になる点などである。さらに、問題になっている分詞としての“um”を動詞活用語尾“-um”と区別なく論じて、“um”が、日本語の助詞「も」(mö)と推量の助動詞「む」(mu)とを包括するものとして位置づけている。

しかしながら、こうした用法の並行現象については、起源的な問題に議論を局限してしまう前に、とりあえず類型的な並行という観点から考察する必要はないであろうか。シンポジウムで長田氏が示唆した考え方である。⁽⁴⁰⁾ 実際、「…も…も」については、インド・アーリヤ語のサンスクリット(梵語)でも、「…ca…ca」(both A and B)という表現に並行現象が観察されるところであるし、近隣のチベット語では、“yañ”(または“kyañ”)が、「も」「また」(=“again, too”:反復、並列)の意のみならず、「なお」「まだ」(=“still”:持続、延長、添加)、「すら」「さえ」(=“even”:類推、譲歩、添加、「すら…ない」の意でしばしば否定語と呼応)、「けれども」「にもかかわらず」(=“although, yet, nevertheless”, 譲歩)、「しかし」(=“but”:逆接)などを表すことが知られている。日本語の「…も…も」と同じ「…yañ…yañ」の用法もある。すなわち、チベット語の“yañ”(“kyañ”)は、仮にサンスクリット語に喩えれば、“ca”、“api”、“apica”、“punar”、“apitu”、“bhūya”、“yathāpi”、“yāvat”、“vā”、“cid”など、さまざまな表現にも相応すべき幅広い意義を包摂していると言えることができる。結果的に、日本語の助詞「も」と極めて近い意味・用法を有していることになる。⁽⁴¹⁾ 同じような並行現象は、やはりチベット語の“dan”と日本語の「と」(格助詞)の間などにも観察されよう。

上に指摘したような類型的な照応の諸事実をたてに、タミル語“um”と日本語「も」、チベット語“yañ”と日本語「や」、チベット語“dan”と日本語「と」などに逐一同系関係を想定していたら、系統論に收拾がつかなくなり、しまいには説明不能になってしまうであろう。こうした類似は、言語類型論でいうところの“膠着語的”(agglutinative)な性質をもつ諸言語にとって普遍的な何ものかに由来する、タイポロジカルな並行現象と見る方が現実的なのではあるまいか。この場合、言語の類型的特点の一致が系統関係とは必ずしも結びつかないという事実も、言語学の常識として、改めて言うまでもない。

(vi) “oṭu”

大野氏は、タミル語“oṭu”を日本語の助詞「と」(tō)に対応させる。確かに、“oṭu”には「と」(associative)の意味はあるが、そうした用法にとどまらず、genitive、accusative、instrumental、dative、locative、enumerativeの用法も広く並行して観察される。⁽⁴²⁾ 日本語の「と」に比べ、用法がはるかに広範であって、意味的にタミル“oṭu”と一対一に対応させ

ることは困難である。

(vi) “atu”

この語は、大野氏によって、日本語「つ」に対応させられている。タミル“atu”はもっぱら genitive/possessive に用いられるが、日本語では、(位置や存在の場所に関する場合など) 用法がかなり限定されていた嫌いがあるようだ。この語の問題点については、家本氏が論及しているので、詳細はそちらに譲りたい。

『以前』252～256頁において、大野氏はタミル“attu”をも日本語の「つ」と対応させ、さまざまな用例を挙げて解説している。『以前』252頁の表を下に掲げよう。さて、この“attu”であるが、“-m”で終わる名詞の斜格形の語幹末尾に現れ、そのまま次の語と結びついて連語・複合語を構成することもできる。大野氏は、日本語の「つ」とタミル語の“atu”、“attu”とが、ほとんどの場合自然界の存在(天、山、海、時など)の「位置」を示すために用いられていると述べ、さまざまな事例を掲げて議論している。ところが、タミルの“atu”にしる“attu”にしる、自然現象や天然の事物にとどまらず、(“attu”の場合は“-m”で終わる語という制約はあるものの)より広い範囲の名詞に付き得るのである。たまたま文献の記述に照らした場合、ほとんど自然界の事物に関係しているように見えただけに過ぎない。特に“attu”の場合は、前述のように、“-m”で終わる名詞の際に現れるが、そもそもこの“-m”で終わる語というのは、原則として人間以外のものを表示し、しかも無生物(非動物)のことも多い。つまり、タミル語文法で言うところの“irrational nouns”であり、大野氏の所謂「自然界の存在」にも当たるものである。従って、大野氏の指摘はある意味で当然であり、言わずもがなのことなのである。

	日本語 tu	タミル語 attu, atu
1. (天空に関するもの)	^{あめ} 天, ^{つち} 地	空. 雲
2. (山に関するもの)	山	山. 丘. 連山
3. (平地に関するもの)	国. 野. 畑. 庭. 花. 家	砂漠. 町. 畑. 庭. 木
4. (海に関するもの)	海. 沖. 辺. 島	海
5. (位置に関するもの)	上. 中. 下. 奥. 前. 後. 外. 内	前. 後. 上. 中. 下
6. (時に関するもの)	時. 常. 前	夜. 夜中. 時
7. (性質その他)	^{しこ} 醜, ^ゆ 斎	偉大. 光. 心

一方、タミルの“atu”のほうは、“attu”とは性格的に異なり、genitive の case ending であって、人物 (rational nouns) にも付き得るものである。従って、“atu”と“attu”とを区別なしに扱うことは危険であるし、何より、「ほとんどの場合自然界の存在の位置を示すために用いられるもの」として“atu”を挙げることは的外れである。

(vii) “akam”

大野氏が助詞「が」に対応すると見る“akam”は、「…の中に」「…の内に」を示す case marker であるが、本来は名詞 (inside, house, place) であったと考えられる。⁽⁴⁶⁾「が」が起源

において“akam”と関連するというのであれば、(前出の“vāy”と同様)「が」も、日本語史の文脈で名詞に由来する事実が証されることが必要なのではあるまいか。

(ix) “tu”

日本語の接続助詞「て」に当たるとされる“tu”であるが、これはタミル語の動詞活用語尾に相当する。また、すべての動詞がこの語尾をとり得るわけでもない。類型論的に用法の並行は確かに観察されるが、形態論的な詳細を考慮すると、両者らを無条件に比較の対象にするのは問題なのではなかろうか。

(x) 助詞のまとめ

大野氏は、『源氏物語』中に現れる語彙に関する統計学的研究を紹介し(『以前』249頁)、使用頻度の最も高い12語を表に掲げて、それらがことごとくタミル語の小辞と対応していると説く。しかし、出現頻度のことを言うのであれば、タミル語の側から見て、出現の頻度が遥かに低い“vāy”や“akam”や“kāl”が日本語の対応語をもつとされる一方、“in”と並んで恐らく最も出現回数が多いであろう“ku”(または“uku”、“ukku”)、“il”、“kaṇ”、“āl”、“ān”といった格語尾が、対応語表のどこにも見当たらないのは奇異と言わざるを得ない。『起源』57頁にも、同様の「対応助詞表」を掲げているが、ここでも、あまり出現しない“vāy”、“kol”、“kāl”、“akam”が日本語に対応語をもつとされる一方で、頻度の極めて高いはずの“ku”(“uku”、“ukku”)、“il”等々は、完全に対応語リストから除外されている。

大野氏は、日本語の助詞とタミル語とを対応させる場合に、タミルの case marker、connecting particle、medial、reflective pronoun など、さまざまな文法的カテゴリーに属するものを一緒に扱って、『起源』57頁では、これらを一括して「助詞」と呼び、『以前』249頁では、「小辞」として片づけている。これは、タミル語の文法体系を軽んじ、或いはことごとく無視した論議であって、承服することはできない。前述のように、対応表の中に“ku”、“il”等の頻出助辞の多くが不在である点といい、自らの所説に叶うよう、日本語の側から、タミル側の諸事実を歪めたものとの印象を免れない。

このように、助詞の考察に関しても、タミル側の語彙の選択にバランスを欠いていたりと、形態的な由来を等閑視するなど、恣意性を感じざるを得ないものとなっている。詮ずるところ、氏の視点は、飽くまでもタミル語で日本語を説明することに向けられ、二つの言語の系統関係に対する比較言語学的に対等かつ平等な吟味を指向したものではないと評さざるを得ない。氏は「日本語とタミル語の助詞・助動詞はこのように驚くほど綺麗に対応している。この顕著な対応は、双方の文法体系の同系性を判断する材料となる」と言う(『起源』62頁)。また、『以前』246頁で次のようにも述べている——「それでは、何が二つの言語の同系論の決め手になるのか。そのことについては、すでに繰り返し述べたように、日本語とタミル語の間で文法的関係を表す重要な要素である助詞・助動詞の対応が音韻法則によって支持されて成立し、その対応語が機能上で共通の役割を果たす、そういう助詞・助動詞を組織的に見出し、確証することが必要である」。確かに、大野氏流の論理によって、日本語の助詞・助動詞はタミル語のそれと「組織的に」対応し、タミル語で「綺麗に」説明がつくのであろう。しかしそのために、タミル語のほうは、或いは文法体系の整合性が無視され、或いは好都合

な語や語義だけが抽出され、或いは「部分」が過度に強調されてしまっている。タミル語の側は決して「組織的」には扱われておらず、「綺麗な」処理のされ方をしているとも言い難いのである。これでは、日本語がタミル語と同系であることにはなり得たとしても、逆にタミル語が日本語と同系であることを証するには何の用も為さないという、矛盾した事態を招来してしまう。

日本語とタミル語が、対照言語学的な研究に多くの興味深い材料を提供するであろうことは間違いない。大野氏は、両語間の類型論的な対応の事実を見出したにとどまらず、さらに深層における起源的なつながりを直観したのであろう。炯眼の為せるわざなのではあろうが、氏は、さらに大胆にも、それを系統論の上で立証しきろうと試みている。しかるに、氏の方法を以てしては、論証にかなりの無理を来たさざるを得ないのではないかというのが、筆者の偽らざる感想である。

III. 語彙の対応に関する問題

1. インド・アーリヤ語起源の語彙について

大野氏がタミル語として掲げている語彙の中に、相当数、インド・アーリヤ語起源と一般に考えられているものが含まれている。インド・アーリヤ起源の語彙に関わる問題点については、家本氏が触れているが、筆者も自らの立場から所感を述べさせて頂くことにしたい。

(i) タミルの語根 “paṭ-” と日本語 “Fat-” の対応

『起源』39頁で、氏は“paṭ-”ではじまる一連のタミル語を表(下表)に示し、それらを同37頁から40頁にかけて詳細に検討している。⁽⁴⁷⁾氏は、これらの語に、「生み出す・成り行く」の意を表すという“paṭ-”なるドラヴィダ(タミル)語の語根を仮構し、それを日本語の語根 Fat- (「生じる・起こる・成り行く」)と対応させている。かくして、タミルの“paṭam”、“paṭaṅku”等の語が、日本語の「はた」(布)、「はた」(旗)、「はたけ」(湿疹)、「はつ」(初)など、多くの語彙と関連づけられることになる。

さて、掲げられた対応語表を詳しく検討してみると、典拠を示す欄に、DEDR の番号に代わって *Tamil Lexicon* のページ数の表記が散見している。このことは、これらの語が、DEDR に記載されておらず、代わりにその典拠を *Tamil Lexicon* に求めた語であることを暗示している。このような例——すなわち DEDR に載っておらず、*Tamil Lexicon* には見出し語がある単語——に遭遇した場合、ふつうインド・アーリヤ語からの借用関係(borrowing)が想定されて然るべきであろう。実際、*Tamil Lexicon* の語源表記欄に、対応するアーリヤ語(主としてサンスクリット語)が与えられていることが多い。この表中の実に過半数が、この種の単語であり、極めて多くの語に関して、(明白に外来語起源であることを規定する)⁽⁴⁸⁾“<”の記号が付され語源が与えられているのである。そのほとんど(“paṭam”、“paṭaṅku”、“paṭal”、“paṭalai”)は、サンスクリット(それぞれ、“paṭa”、“paṭaka”、“paṭāla”、“paṭāla”)からの借用語(loanword)とされる。

	DEDR
①paṭ-am (布)	(TL 2431)
paṭ-am (旗)	(TL 2431)
paṭ-am (風)	(TL 2431)
paṭ-aṅku (着物)	(TL 2430)
paṭ-al (編んだカーテン)	(TL 2433)
.....	
②paṭṭ-i (生れた息子)	(3840)
③paṭ-ukar (田んぼ・農作地)	(3856)
.....	
④paṭ-uvan (発疹)	(3859)
.....	
⑤paṭ-u (初)	(TL 2440)
⑥paṭ-u (成り行く・果てる・死ぬ)	(3852)
⑦paṭ-u (酒) (元気を生じる)	(TL 2441)
⑧paṭ-alai (果物の房)	(TL 2433)
paṭ-arri (バナナの房)	(TL 2441)

もちろん、これらの語をはじめからインド・アーリヤ起源と決めてかかることは学問的態度とは言えまい。カルカッタ大学の言語学者 S. K. Chatterji などは、ドラヴィダ語などからインド・アーリヤ語圏に入り、ヴェーダ語やサンスクリット語 (古代インド・アーリヤ語)、さらにプラークリット語 (中期インド・アーリヤ語) などの中に定着した語彙が予想以上に多い可能性すら示唆している。⁽⁴⁹⁾ 語源学的な研究が進めば、派生関係 (derivation) が逆転するものも当然ないとは言えない。しかしながら、そうした議論も敢えて踏まえぬまま、これまでタミル以外に語源が想定されていた単語を、日本語＝タミル語の同系関係を立証するための対応表に掲げては、これらがいかにも正真正銘のタミル語であるかのごとき印象を読者に与え、誤った判断に寄与することになりはしまいか。もっとも大野氏が、これらの語が本来タミル語 (ドラヴィダ語) に固有の単語であり、それがむしろインド・アーリヤンに採り入れられたのだと主張するのであれば、話は別である。その場合は、その旨——一般に他言語からの借用語とされているが、ドラヴィダ語起源の語であること——を明確に断った上で、具体的な立証の手続きが示されるべきであろう。そのプロセスを経てこそ、そうした語彙を含む日本語＝タミル語の対応表は、はじめて論議の対象になり得るからである。

逆に、“paṭam” 以下の単語がサンスクリットに由来し、のちにタミル語に借用されたものであるとの判断に立つのならば、大野氏は、今度はサンスクリットからの多数の借用語を含むタミル語の語彙体系全体と日本語との系統関係を立証しなければなるまい。こうなると、インド・アーリヤ語、ドラヴィダ語、日本語という三者関係をめぐる、はるかに煩雑な問題を派生することになり、議論がより紛糾してしまうことにもなり兼ねない。アーリヤ語から

の借用の年代、ドラヴィダ語と日本語の交流の時期など、年代論に関わる問題を含め、大野氏のこれまでの立論に破綻は生じないのであろうか。

同種の問題は、サンスクリット “kathā” (物語) からの派生を動かし難いタミル “katai” (『起源』対応語表3頁)、同じくサンスクリット “guhā” に由来するであろうタミル “kukai” (『起源』対応語表5頁)、家本氏の指摘する同じくサンスクリットの “sukhin” に起源するであろうタミル語 “cuki” (『起源』204～207頁、同対応語表6頁)、やはり家本氏の指摘にあるサンスクリット語 “modaka” に起源すると目されるタミル語 “mōtakam” (『起源』95頁、同対応語表17頁) などにも当て嵌まることである。これらは、語自体の根源的な由来については今や知るよしもないが、少なくとも現存のタミル語形そのものに関して言えば、サンスクリットの相対物と一対一の対応を為しており、慣用的な規則に準じて前者をタミル語化したものであることを如実に表わす語形を呈している。

いずれにせよ、大野氏の掲げるおびただしい対応語彙の中に、このように少なからずサンスクリット語起源が疑われるものが含まれており、相応の検討が施されていないのは残念なことである。日本語＝タミル語の同系関係を証明するのであれば、こうした来歴に問題の残る単語を極力避け、より穏当な語彙に拠って為されるべきではあるまいか。この対応表の中で、サンスクリット起源が想定される7語を除いた6語を以てしても、氏は敢えてタミルの語根 “paṭ-” (「生み出す・成り行く」) を再建しようというのであろうか。ちなみに、残された6語の語義を大野氏の表現を借りて列挙すれば、「生まれた息子」、「田んぼ・農作地」、「発疹」、「初」、「成り行く・果てる・死ぬ」、「酒・元気を生じる」、「バナナの房」ということになるが、これらの中に、共通する「生み出す・成り行く」の原義を認め、それを日本語の語根 “fat-” (「はつ」「はた」など) と比較することが、果たして可能かつ妥当なのであろうか。

(ii) 「三層的世界把握」をめぐる問題

氏は、「三層的世界把握」(『起源』187～190頁、『以前』42～46頁) のアイディアに関連して、タミル語 “amar” ないし “amarar” を引き合いに出し、日本語で「天界」を表す「あま」や「あめ」との対応関係を立証しようとしている。

まず、タミルの “amar” なる単語は、大野氏によれば、「住む・静謐になる・休息する・栄える」の意とされる。恐らく *DEDR* の161番の記述に拠ったものであろう。ところが、氏は、この語と “amarar” を語源的に同じものと判断した上で、「この amar に ar (「人」の尊敬体) を加えた単語 amar-ar がある」と述べ、「天国の人々、不死の人々」を意味すると語義解釈してみせる (『起源』189頁)。ところで *DEDR* では、161番を含め、まったく “amar-ar” について沈黙している。辞典編纂者たちが、この語をドラヴィダ語起源のものと認めていないことは明らかである。現に *Tamil Lexicon* (p. 102) は、“amarar” の項で、“amara” という語をその語源に指定している。すなわち、この “amarar” なるタミルの語彙は、サンスクリット語も学んだ者なら誰でも気づくように、もともとサンスクリット “amara” (「不死の」、「不死なる者 (=神)」) に由来するものであって、そのタッドバヴァ (タミル化した形態) なのである。従って、大野氏の言う “amar” に “-ar” が付いたものではなく、“amara” に “-r” が付いた形と理解すべきである。氏は、誤って “amar” と “amarar” を同

根と見なし、それを日本語の「あま」等に関連づけて、錯誤した語源説に終始しているのである。

もちろんこの場合も、氏が、ドラヴィダ語からサンスクリット語への逆方向の貸借関係を主張し、それを十分に証明できるのであれば問題はない。しかし、サンスクリット“amara”に限り、それは至難の技であろう。“amara”は、“mara”に否定の接頭辞“a-”が冠せられたもので、“mara”は疑いなくサンスクリットの動詞語根“mr̥”から派生している。この“mr̥”は、英語の“murder”や“mortal”等とも語源的に関連することからもわかるように、遙か印欧祖語にも遡及し得る語根である。このことから、“amarar”を本来のドラヴィダ語とすることは、概して無理であることが納得されよう。

大野氏は、やはり「三層の世界把握」に関する議論の中で、タミル古代の神 Māyōn に言及し、その天上界・地上界・地下界にわたる巨大な三步を紹介して、所説の拠り所の一つとしている（『以前』45頁）。梵文学や南アジア世界の宗教事情に少しでも造詣・関心のある者なら、この記述に接すれば、すぐさまヴィシュヌ神を想起するに違いない。まさに古代タミルナードゥの Māyōn なる神格（Māl、Tirumāl などとも呼ばれる）は、この北インド・サンスクリット世界の至高神ヴィシュヌが移植されたものであって、原則的にそれと起源・特徴を一にする神なのである。⁽⁵⁰⁾大野氏自身が別の箇所で引いている *Kamparāmāyaṇam* (alias *Rāmāvatāram*) の一節（『以前』167頁）「世界ノ三層ヲ守ッテイル人ノ妹」の中の「世界の三層を守っている者」こそ、このヴィシュヌ神に他ならない。一部のタミル人研究者の間で、⁽⁵¹⁾Māyōn 神のタミル起源説がまことしやかに唱えられていることは事実である。ただし、それは学界の大勢からはほとんど問題にされていないことも承知すべきであろう。

「三層の世界把握」の件についてさらに述べれば、古ウパニシャッドの五火二道説などにも類似の考え方が知られており、同種のアイディアは、その後のインドの思惟（サンスクリット語による哲学思想）の展開に大きな影響を及ぼすことになる。大野氏は、「三層の世界把握」について、北アジアのシャマニズム社会のそれや、南方世界（ボルネオ、ミクロネシア等）のものと並んで、古代タミル地方にも同様に見られると指摘しているが、この種の世界観は北インドのアーリヤ語世界にも遍く普及しているのである。

大野氏には、タミル文化、とりわけその宗教文化を扱う場合、インド思想史・宗教史全体の展開を視野に入れた上で論じられることを切に希望したいと思う。

2. 農耕語彙をめぐる

農業あるいは耕作に関係した文化語彙は、氏の系統論の上で極めて重要な役割を付与されている。古代文化の再建の議論にとって不可欠だからである。やはりここでも、氏は下のような表を掲げつつ議論を展開している（『起源』95頁）。“paṭukar”が有する難点については、のちに辞典をめぐる問題提起のところで改めて詳説することになっているので、ここでは、まず“cītai”の件から着手したい。

タミル語	日本語	朝鮮語
畠 paṭ-ukar	Fat-akē	pat

粦	cīt-ai	sit-ōgi	stök
串	kucc-i	kus-i	kot
犁	vēl	Fer-a	pyöt
稻	nel	ni	ni

(i) “cītai”

まず、表中に “cītai” とあるのは、恐らく “cītai” (*DEDR* 2612: “small ball cakes of rice flour”) の誤りであることを指摘しなければならない（そのままだとラーマの妃スィーターの⁽⁵²⁾ことになってしまう）。この “cītai” の語は、N. Subrahmanian のインデックスにも、ポー⁽⁵³⁾ンディチェーリのフランス・インド⁽⁵⁴⁾学研究所のインデックスその他にも、まったく記載されていない。*DED*、*DEDR* の編集方針から推して、*Tamil Lexicon* が典拠になっていることが考えられるわけだが、*Tamil Lexicon* (p. 1474) では、シュリーヴァイシュナヴァ派の聖典 *Tivviyappirapantam* の Periyālvār (バクティ詩人・ヴィシュヌ派の聖者、10世紀頃) に典拠を求めている。これは、いかにも後代に属する用例と言わざるを得ない。のちに述べるように、*Tamil Lexicon* は、その編集方針 (liv-lx) から察するに、語が用いはじめられた時期がある程度類推できるよう、原則としてなるべく早い時期の用例・典拠を掲げているはずである。語源や系統をめぐる議論に説得力をもたせるためには、この10世紀という年代を伴う語の使用は、やはり妥当を欠く印象を免れない。氏が上述のような「典拠」の問題にどれだけ配慮しているかは、のちに指摘するようにいささか疑問なのであるが、ここでも氏は、当の用例が早い年代に属するの⁽⁵⁵⁾か否かを入念に見極めた上で、出典に関するクロノロジカルな情報も逐一可能な限り明示し、より周到に議論を運ぶべきだったのではなからうか。

(ii) “kucci”

同様の難点は、次の “kucci” についても指摘できる。この語は、現代タミル語においては「串」「楊子」などの意で一般に用いられているが、やはり古層の文献には用例が知られていないようである。*Tamil Lexicon* (p. 955) によれば、この “kucci” と、それとやや語形を異にする “kuccu” (sprinter, plug, any bit of stick, stalk, etc.) の双方が、ともに “kurri” (*Tamil Lexicon*, p. 1044; stump, stub, stake, block, log) から派生したものとされる。“kucci” の用例は古いものに見当たらないが、“kuccu” の方は、その例が僅かに *Purāṇ ānūru* 257 に “kuccupul” (*Tamil Lexicon*, p. 956) という複合語の形で見いだされる。しかし、これも “cluster-grass” のこととされ、「串」等の意とは大きく異なっている。大野氏は、この *Purāṇānūru* 257 中の “kucci niraitta kurūmayir mōvāy” という行に見える “kuccin” (引用した韻文中では、詩脚 cīr の関係から、kucci の語末の -n が離れて表記されている) の語を “kucci” の用例として、『以前』149頁に掲げている。しかしこれは、厳密に言えば、“kuccu” の genitive 形であって、“kucci” のそれではない。用例の掲出には慎重を期⁽⁵⁵⁾してもらいたいものである。

(iii) “vēl”

“vēl” (*DEDR* 5536) に関しては、語義の大きなズレの問題を挙げておきたい。大野氏は、

この語を農具の「犁（すき）」ととり、日本語「へら」（Fera）、朝鮮語“pyöt”と語源的に関連づけている。しかし、タミル語“vēl”に関して言うなら、*DED-DEDR*、*Tamil Lexicon*、*Pre-Pallavan Tamil Index*、他のインデックス類（*Kuruntokai*、*Aṅkurunūru*、*Akanānūru*、*Cilappatikāram* などのもの）の何れを検索しても、武器としての“vēl”（dart, spear, lance, javelin, trident, weapon, etc.）を除いて他の意義を見いだし得ない。僅かに、“conquering”、“enemy”等、武具以外の意味も散見するが、何れも例外なく闘いの観念と連合している。⁽⁵⁶⁾特に古い文献（*Puranānūru* など）では、もっぱら「槍」として現れており、「犁」に限らず、農具としての用例も全時代を通じて皆無である。さらに、古典タミル語においては、「槍」でもいわゆる「投げ槍」（投擲用の鋭利な武器）を指すことが多く、この点でも、土を掘り起こす「犁」の類の農具とは意味的に懸け離れている。

そもそも氏は、『起源』95頁の表に掲げる「犁」としての“vēl”の意味をどこから探り当ててきたのであろうか。氏は同書の別の箇所⁽⁵⁷⁾で、“vēl”に対して、「（「やす」については疑問が残るものの）概ね妥当な「槍・やす」の意を与えているが、如上の議論との一貫性を欠くものである。

一方、『起源』に先立って出版された『以前』（149頁）の中で、大野氏は、“vēl”の意として「投げ槍、槍、やす、独鈷、薙刀」を挙げている。ここには、「犁」の意が見えない代わりに、「薙刀」が掲げられている。これも、「犁」と同様、氏が依拠しているはずの *Tamil Lexicon*、*DED-DEDR* などには見当たらない語義である。氏は、「薙刀」の意を含む文例として *Puranānūru* 95 を引き「我ヲノ王ノ鋭イ切先ノ薙刀（vēl）」との訳をつけている。しかし、原文（aṇṇaleṇ kōmān vainnuti vēlē）に照らす限り、“vēl”の語を取えて「薙刀」と解すべき必然性はまったくない。ここは注釈家 Auvai Cu. Turaicāmpilāi（1902-1981）の読みに素直に従い、「領袖たる我らの王の鋭い先端をもてる槍」と取って、何の不都合も生じないし、⁽⁵⁸⁾はるかに自然な解釈と言うことができる。

(iv) “poṅkal”

農耕語彙に関連して、大野氏が日本語＝タミル語をめぐる一連の著作の中で繰り返し説いている「ボンガル」（“poṅkal”，*DEDR* 4469）の問題についても、少しく論評を加えておきたい。

『起源』中ではとりわけ102～107頁に、『以前』では47～51頁において、タミルと日本の豊作儀礼などとの関連のもと、議論が展開されている。“poṅkal”の語は、*Cilappatikāram*（5世紀頃？）のインデックス⁽⁵⁹⁾によると、“preparation of boiled rice”とあるが、*Pre-Pallavan Index* では、*Cilappatikāram* 中の同じ箇所（V.69）に関して“fermented toddy”の語義を掲げている。同書の U. Vē. Cāminātaiyar による出版本も、この“poṅkal”を“kaḷḷu”（toddy、椰子酒）と解している。⁽⁶⁰⁾注釈家の Cōmacuntaraṇār も、この部分をやはり“kaḷḷu”と解釈しているが、⁽⁶¹⁾（現代のいわゆる「ボンガル」）にも通じる“boiled rice”の蓋然性を必ずしも排除しない説明のしかたをとっている。⁽⁶²⁾

しかし、Cōmacuntaraṇār の解釈のように、仮に *Cilappatikāram*——狭義のサンガム時代（1?～3世紀）以降に成った作品——の記述の中に、現在の「ボンガル」状の食べ物と

取り得るものの存在の可能性を留保したにしても、この作品自体の年代が、大野氏の所説を支えるためには十分に古いものとは言えず、氏の唱えるような太古の両文化間の密接な交流の事実を窺わせる証左とはなり難いように思われる。

大野氏は『国文学解釈と鑑賞』に連載している記事の中で、*Perumpāṇār ruppai* (サンガム後期) 192~196行目を引き、そこに述べられた御飯を日本の小豆粥に当たるものとして同定している。⁽⁶³⁾氏はそれを「ボンガル」(=米をミルクで炊いた粥状の御飯)と見做すのであるが、「小豆」を指すとする“avarai”の語が「小豆」の種類の豆である保証はない。問題の御飯についても、単純に「豆御飯」と解するのが一般的である。

“poṅkal”の語自体も、かなり信頼性の高い前掲 *Index des mots de la littérature tamoule ancienne* (p. 1115) などによると、バクティ以前の文献群では僅かに数例しか見当たらないことも指摘しておきたい。その場合でも、例えば *Aiṅkurunūru* 276 に見える “poṅkal-iḷ⁽⁶⁴⁾ amalai” の “poṅkal” は、「湧き立つ (雲)」を表し、いわゆるボンガルのことではない。*Akanānūru* 129、“poṅkal veṅkāḷ”のそれは、「たくさんの、大きな、甚しい」(mikutiyaṇ⁽⁶⁵⁾ a)の意を表す。また、*Patir ruppattu* 55にある “poṅkalāti”中の “poṅkal”の語は、「上へ立ち昇る」で用いられている。このように、*Cilappatikāram* 以外の、しかもそれより時代が遡る僅かな用例のうちの何れを取ってみても、大野氏の主張する「ボンガル」(=米をミルクで炊いた粥状の御飯)⁽⁶⁷⁾を示すものは存在しないのである。古代・中世のタミル文化史を専門とするマドラス大学の K. K. Pillay も、著書の中でこの “poṅkal iḷamalai” と “poṅkal veṅkāḷ”⁽⁶⁸⁾について、何れも、(食物のボンガルではなく)雨季の到来と関係した表現である旨を明言していることも、この際指摘しておきたい。

そもそも、タイボンガル、すなわちタイの月 (1月半ば~2月半ば) に祝われるボンガル祭が、サンガム時代に存在したかどうかは、専門家の間でも疑問視されている。前出の K. K. Pillay は、“tai ūṇ” (断食のあとに食べるタイ月のご馳走) に関しては文献中に言及があるが、それが今日の収穫祭としてのボンガル祭に等しいものかどうかは、まったく不明である⁽⁶⁹⁾としている。次項の辞典使用をめぐる議論とも重複するが、大野氏は、著書『以前』の中で、*Tamil Lexicon* の記事と断りつつ、名詞 “poṅkal” の意味内容を「沸騰。豊穰。最盛。正月15日に作る粥」(『以前』48頁)と紹介している。さらに、「だから、タミルでは正月15日の新年の最初の日に、油・砂糖・米という食料品の豊穰を祈ってボンガロー・ボンガルと叫ぶのである」と解説を加えている(『以前』48頁)。これは、『起源』106頁からもわかるように、*Tamil Lexicon* (p. 2911) の “poṅkal” の項目の第4義を承けているものと思われるが、辞典中ではこの意義に見合う典拠がまったく与えられていないのである。このことから、一種の祭礼としての「ボンガル」は、古典文献中で言及されることが無いが、仮にあったとしても、きわめて稀であることが想像される。大野氏に好意的に解釈すれば、せいぜい、庶民的な性格の強い儀礼であったため古典に記述されることが無かったということにでもなるうか。

ところで大野氏は、青森県の小正月の行事で用いられる掛け声「ホンガラホンガラ」とタミル地方のボンガル祭でのそれ「ボンガロー・ボンガル」(poṅkalō poṅkal) について、両

者の音韻的一致と使用される状況の対応関係を指摘したあと、次のように述べている——「これは日本とタミルの稲作が単に行事として平行するだけでなく、起源的に一致するものであることを証する有力な証拠であろう」（『起源』107頁）。しかしながら、上に述べたように少なくともタミル語の古い文献中にポンガル祭を示唆する情報が取り立てて見当たらない以上、これら二つの儀礼を起源的に結びつける有力な資料的根拠は、存在しないことになる。

大野氏は、ポンガル祭を重視し、日本とタミル社会とを繋ぐ重要な文化要素と位置づけている。しかし、氏の著書中には一例も古典からの引用が見当たらない。特に、『以前』では、全体を通して、できるだけ対応語の一々にタミル語の例文を付して掲出しているにもかかわらず、同161頁の日本語“Fonga(ra)”とタミル語“poṅkal”の対応を示した箇所に限って、タミルの文例の提示が一切なしに済まされている。これは、氏も古文獻中に用例が見出せなかったために他なるまい。古代の文献にポンガル祭が現れないことに気づいていた以上、この祭をめぐる比較文化的な事象を説くに当たっては、文例の不在の事実にも等しく言及し、納得のいく説明を施した上で議論をすべきではなかったろうか。

そもそも、今日のタミル地方で盛んに行なわれているポンガルの儀礼は、近代の政治的動向や、それと連動したタミル民族主義のうねりを承け、今世紀に入って非バラモン的な性格が誇張されてきた嫌いがある。⁽⁷⁰⁾タミル人固有の祭であるという意義が故意に強調され、民族の尊厳の象徴として、政治的な意味合いが付与されているのである。ポンガル祭を考察するに当たっては、このような近現代の政治・社会の文脈で「再編（創出）された伝統」としての一面を有することも念頭に入れ、過大評価を戒めながら慎重に取り扱う必要があるであろう。

IV. 辞典の使用に関する疑問

1. *Tamil Lexicon* と *DED-DEDR* の語義の配列について

次に、この種の研究でゆるがせにできないと思われる、タミル辞典の使用をめぐる諸問題について、感じたところを記してみたい。

DED-DEDR は、序文の中で、タミル語に関する記述について *Tamil Lexicon* を有力な拠り所としている旨を述べている。さらに同じ序文は、その *Tamil Lexicon* が2000年間の長きにわたる語彙・語義を配列していることにも注意を喚起している。すなわち、*DED-DEDR* も、*Tamil Lexicon* も、もっぱらサンガム時代のタミル語を扱った辞典ではないのである。タミル語辞典なるものは、さまざまな時代に属する語彙、語義、用例などを一堂に集めたものである以上、過去2000年にわたるタミル文学史のスパンを念頭に置きつつ、慎重に使用されるべきであるということであろう。*DED-DEDR* の場合など、語義が単に羅列されているだけであるから、特に注意を要する。初出についても何ら判断材料が与えられていないし、⁽⁷²⁾再建形（ドラヴィダ祖語の語形）も明確に示されていない。従って、*DED-DEDR* にせよ、*Tamil Lexicon* にせよ、記載されている内容を、年代論的な吟味を経ずに、いきなり比較言語学や歴史言語学の材料として利用することは危険である。記載内容に疑問が生じた折に逐一原典資料に遡り、典拠が明示されている場合には、その作品の文学史上の位置づけや成立年代を確かめるような批判的な扱い方が求められよう。それを怠ると、都合

の良い語彙や語義だけを抽出して、それを特定の時代と結びつけるような初歩的な過ちを犯し兼ねない。

日本語 = タミル語に関する当該の問題などを扱う場合、例えば *DEDR* に記載された語義であれば、そのつど *Tamil Lexicon* に遡り、単語の core meaning を突き止め、用例を踏まえて語義の時代的位置づけを確認する作業が必須となろう。時には、索引類なども参照しつつ初出年代を見極める（ないし少なくとも見当をつける）ことも必要である。ところが、大野氏のアプローチには、そのような学問的な姿勢を疑わせるような場合がしばしば見受けられるのである。以下に、わかりやすい例を引いてそのことを示すことにする。

2. “paṭukar” の語が例示する問題について

『起源』(39、90、95頁など) 及び『以前』(138頁以下) の中で、日本語「はたけ」に当たる語として再三にわたって言及されている “paṭukar” の語を取り上げ、問題点を例示したい。この語彙が記載された *Tamil Lexicon* (p. 2441f.) の一部(上)と、同じ語が現れる *DEDR* (p. 345) の頁の一部(下)を以下に各々提示する。

Tamil Lexicon では、“paṭukar” の項目を立て、“path of ascent and descent” を筆頭に、語義を5つの範疇に大別して説明を施している。ところが、*DEDR* では、それらのうちの第1義が無視され、それを除く4つの意味範疇が、*Tamil Lexicon* で与えられた順番にそのまま羅列されている。その理由は恐らくこうである。つまり、*DEDR* の著者(編者) Burrow と Emeneau は、“paṭukar” を3856番のエントリーに加えるに当たって、タミル語 “paṭu”、同 “paṭuvam”、マラヤーラム語 “paṭu”、コダグ語 “paḍi” などと語源的に同系列の単語として配置するためには、その第1義 (“path of ascent and descent”) が不可解ないし不都合に映り、第1義の由来だけを別のところに想定するか保留事項として扱い、敢えて記載から除外したのであろう。

படுகர்¹ paṭukar, n. <id. 1. Path of ascent and descent; இழிந்தேறும் வழி. (பிங்.) ஆரிப்படுகர்ச் சிலம்பு (மலைபடு. 161). - 2. Pit, hole, hollow; பள்ளம். (திவா.) தான்வழும் படுகர் வீழ்த் தான் (குற்ற. தல. புட்பகந்த. 16). 3. Tank; நீந்தலை. (பிங்.) தத்துநீர்ப்படுகர் (திருவிசைப். கரு ஆர். 8, 9). 4. Rice field; வயல். (W.) 5. Agricultural tract; மருதநிலம். பூம்படுகர்ப் பகட்டினங்கள் (காஞ்சிப்பு. திருநாட்டு. 131).

3856 *Ta.* paṭu tank, pond, deep pool; paṭukar pit, hole, hollow, tank, ricefield, agricultural tract; paṭuvam slushy field; paṭṭam tank, pond. *Ma.* paṭu a rough tank. *Kod.* paḍi swamp. *Te.* paḍiya, paḍe small pit containing water; paḍuva a low ground. DED(S) 3192.

さて、*Tamil Lexicon* は、その序文 (lviii-lix) の内容からも窺われるように、原則としてクロノロジカルな語義配列になるよう配慮が施されている。それが不可能な場合は、論理的な順に、すなわち意味論的により根源的・基本的と見なされ得る語義から順番に掲げられている。そこで、あらためて“paṭukar”の項目を見ると、第1義にある“path of ascent and descent”には、語義をタミル語でそのまま言い換えたあと、括弧内にタミル字で“Piñ.”という表記が加えられている。このことは、この語義が *Pinkalanikaṇṭu* (*Pinkalantai* とも) という古辞書 (ニガンドゥ文献) からのレキシカルな情報に基づいていることを示している。この辞典は、時代的には、同様の古辞書文献である *Tivākaram* (8世紀前半) と文典 *Nann-ūl* (12～13世紀) の間に位置づけられている。さらにその後で、例文を示し、やはり括弧内に *Malaiṭaṭukaṭām* 161 という典拠が与えられている。この作品はサンガム文学の *Pattuppāṭṭu* (『十の長詩』) に属するものであるから、この第1義がかなり古い時代に遡られ、しかも後世の辞書文献にも記載されていることがわかるのである。*Tamil Lexicon* では、古辞書が典拠として与えられている場合、原則としてその頃に使われ始めたものと理解して概ね差し支えない旨、序文に述べられている。もちろんこれにも批判的な吟味が要求されることは言うまでもないが、我々の作業を進める上で、作業仮説的な、初出を推定する一応の目安として考えることは許されるであろう。

次に“paṭukar”の第2義として、“pit, hole, hollow”が掲げられ、前出の *Tivākaram* が出典として示されている。同様に第3義に関しても *Pinkalanikaṇṭu* に基づく語義に続いて、*Tiruvicaippā* というバクティ関係文献からの用例が紹介されている。第4義の“rice field”については、“(W.)”すなわち Winslow のタミル辞典 (初版1862年) を掲げている。恐らく古文獻に典拠が求められなかったのであろう。*Tamil Lexicon* の冒頭の説明によれば、こうした近代の辞書が典拠に掲げられている場合は、語源が不明確であり、しかも用いられることの稀な語義とされている。第4義と並んで大野氏の主張にとって重要な意味をもつであろう第5義“agricultural tract”は、やはりタミル語での語義の言い換えのあと、*Kāñcippurāṇam* や *Tirunāṭṭuciṛappu* が掲げられているが、何れも中世後期、場合によっては18世紀頃まで成立が降る可能性もある諸本である。

このように、*Tamil Lexicon* では、細部に問題は常に残るものの、大筋において時代の順に語義が配列され、その語義が準拠する出典が掲出され、かつ (注意深く読めば) 記述の信頼性などまで暗示される仕組みになっているのである。

ところで、大野氏は『起源』90頁において、現地の農民に“paṭukar”の意味を尋ねたときの様子を描写している。彼らは、*Tamil Lexicon* の第4義ないし第5義に相当する「お米を作る場所」「畠」「農作地」を結果的に表示するさまざまな表現で回答したという。ここで現代人が (*Tamil Lexicon* の第1義「道」ではなく) 第4義、第5義を口にするのは、考えてみれば不思議なことではない。先に紹介したこの辞典の意味記述の原則からして、古いものから順に語義が配列されているからである。しかし、問題の第4義と第5義が、用例自体かなり新しいか、あまり用いられない出典不明のものであることも、既に説明した通りである。「窪地」のような比較的古い意味から「田んぼ」や「畑」のような語義が二次的に派生

した可能性がまったくないとは言えない。しかし、*DEDR* の記事から明らかなように、他のドラヴィダ諸語の cognates には「田んぼ」「畑」の意味は特に無いことから、仮に「窪地」から「田んぼ」「畑」への意味の転化があったにせよ、それは恐らくタミル語の環境に限られた現象であって、しかも後代に生じたことが予想されるのである。従って、比較研究の結果に説得力をもたせようとするのであれば、そのような難点を抱える語義を敢えて俎上に載せることは控え、より基本的かつ古い用例が確認できる語義を何よりも優先すべきではなかろうか。大野氏の当該研究においては、比較の対象となるタミルの単語に与えられた語義の選択が、多分に恣意的であると見做さざるを得ないのである。先に指摘した“vēl”の事例からもわかるように、どの辞典にも見出し難い語義が掲げられていたりなど、語義の提示が意図的に操作されているのではと、勘ぐりたくなるものすらある。ユトレヒト大学の Zvelebil 教授は、『言語研究』第95号(1989年)に掲載された大野氏の“The Genealogy of the Japanese Language: Tamil and Japanese”を評して、そこに掲げられたドラヴィダ語(タミル語)の語彙の選定が特に問題のない旨を述べているが、実際に詳細な検討を施こしてみると、教授の保証にもかかわらず、多くの疑問点が検出されるのである。⁽⁷⁸⁾

3. “uvaṇ”などの問題

初出の問題に関連して、今一つ例を示そう。大野氏は、『起源』231頁で、「タミル語・日本語・朝鮮語の共通語」として対応表を掲げ、三者にわたって共通とする語彙を提示している。その中には前出の“paṭukar”も見えるが、共通の母音[u]を含む対応語として、タミル語“uvaṇ” (上)、日本語“uFa”(上)、朝鮮語“uh”(上)が挙げられている。さて、この“uvaṇ”であるが、*DEDR* 557で“upper place, place above”という語義が与えられている。そもそも *DEDR* 557は、中称の指示詞語基(demonstrative base)である“u”(それ)と語源的に関連する単語を扱っている項目であるから、この“uvaṇ”の基本義が「上」というより「そこ」「その場所」であることが示唆される。実際に Winslow の辞書(p. 151)では、“there, in that place”という意味を与えており、しかも“(p.)”(=poetic)という表記からもわかるように、この語が韻文にしか出典を求め得ないことも、併せ知られるのである。*DEDR* 557の記述内容などから判断して、恐らく、こうした原義から転じて「あちらの世界」ないし「天上来」という意味が生じ、それがさらに「上」「上方」という語義を派生したものであろうか。しかも中称指示詞に由来する語で「上」の意を表す語彙は、*DEDR* 557中でこのタミル語“uvaṇ”を措いて他のドラヴィダ語 cognates 中にまったく見当たらないのである。恐らく、これはタミル語の環境に起こった特殊な意味変容なのであろう(——しかも後述のように9世紀頃の)。いずれにせよ、*DEDR* 557の項目中には、中称指示詞「そこ」「それ」の意を承けた語彙が圧倒的に卓越しており、“uvaṇ”がこの項目に分類されるのが適当であるとすれば、その原義もやはり「そこ」とすべきであろう。さらに、*Tamil Lexicon* (p. 461)及び各種のインデックスによると、“uvaṇ”の語の典拠は *Civakacintāmaṇi* という作品であり、この語がそれほど古い時代には遡れないことが想像されるのである。⁽⁷⁹⁾ Zvelebil によれば、この作品の成立は中世の10世紀を遡らないとされている。

これらのことは、“uvaṇ”をこの種の比較言語学的考察に用いるに当たっての難点を浮か

び上がらせる。

一つは、この単語が極めて稀にしか現れず、しかも韻文の環境に限られ、かつ語義もやや特殊性を帯びているという事実である。二つ目には、この語を比較に用いる際には、この語のみを関連語群から単純に切り離すことをせず、それが所属する中称指示詞“u”とそのドラヴィダ諸語における cognates を広く見わたし、語群の core meaning を類推・検討し、その語の語形や語義の普遍性と特殊性を踏まえた上で、比較が為されるべきであるということである。第三には、この語の初出と典拠を突き止め、問題点の有無を点検してから、然るべき比較を行なうべきであろうということである。

上述のような問題点は、先ほど来再三にわたって指摘してきたように、“paṭukar”や“uvan”の事例に限らず、大野氏の著述中で枚挙に暇のないほどである。氏は、日本とタミルナードゥの間の関係を立証しようと、古代の日本や南インドのさまざまな年代や文化要素に言及しながら歴史的脈絡での議論を展開しているが、そうであればなおのこと、肝心要の語彙や音韻の比較の作業に当たっては、語義、初出年代、典拠、他のドラヴィダ諸語との関係などにわたって、より周到的な吟味が求められるはずである。大野氏は、自認する「語根の厳密な音韻の対応」にかなう代表例（『起源』90頁）として、前出の“paṭukar”と「はたけ」の対応を掲げている。氏の方法が、上述のような次第で、真の厳密さを欠くものとせざるを得ないとすれば、この事例は、むしろ逆に氏の手法の学問的厳正さに対する反証ともなり兼ねないものであろう。

V. 結びにかえて

以上のように、大野氏の日本語＝タミル語起源説は、手法や方法論の面でさまざまな問題点を抱えているものと評さざるを得ない。

筆者が指摘した中では、借用語（主としてサンスクリットからのもの）の問題、語彙の質の問題、語ないし語義の初出の問題の三つに大きく集約されよう。筆者の立場からすれば、こうした三点に象徴されるような、方法の不備に由来する合理的根拠の薄弱さこそが、説の信憑性をより低いものにしているのである。

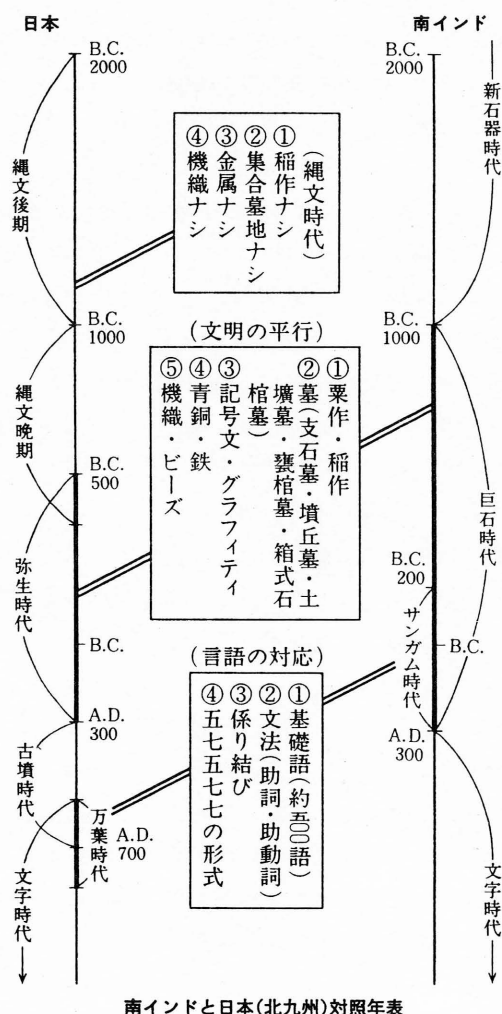
氏は、『起源』114頁に左のような図を掲げ、日本（北九州）と南インドの古代を巧みに対照させながら相互関係を論じている。⁽⁸⁰⁾氏はタミル語と日本語の間に500の基礎語の対応が見られるという。しかしながら、これまでの議論からも察せられるように、この500という数字は恐らく大幅な減少を余儀なくされるに相違ない。しかも、残ったタミル語の語彙もしくは語義のかなりの部分は、サンガム時代にはその存在ないし用例を証明できず、初出の時代がかなり降るか、年代の特定が不可能なものであることも確実である。⁽⁸¹⁾日本と南インドをめぐる大野氏の所説を成り立たせるためには、「古代」の両言語の間で対応が見いだされることが何よりも望ましい。しかし、それを支持するはずのタミル側の語彙の多くが、その要件を満たさないとするなら、氏の論拠はそれだけ乏しくなってしまう。仮に、時代の降るタミル語の多くの単語と万葉時代の日本語との間に対応関係が確立されたとした場合、素直に考えれば、波及関係が逆転し、日本側から南インドへの文化の流入や民族移動をすら仮設する

必要が生じよう。これは大野氏自身も認めるように、不合理である（『以前』334～335頁）。認めようものなら、今度は考古学者や日本史家のほうから、ごうごうたる非難や反駁の渦が巻き起こることであろう。

かつて佐原眞氏は、1989年に開催された日本語の起源をめぐるシンポジウムの中で、縄文中期にタミル語が伝播したとする大野氏の見解が正しいとするなら、日本で縄文時代晩期から弥生期にかけて登場する臼（うす）や杵（きね）、さらに、紀元後8世紀以前、或いはせいぜい5、6世紀以前には遡及できないと考えられている筈（はし）などが、言葉としては既に縄文中期に日本に伝えられていたことになり不合理であることを指摘した⁽⁸²⁾。仮に大野氏の所説が正しいと仮定すれば、「縄文時代から奈良時代まで、連綿としてタミル語は日本列島に流入し続けたことになる」からである。まさに正鵠を射た批判である。大野氏は、この難点を克服するためか、その後に出版された『起源』（244頁）中では、年代を「紀元前数百年の頃」（すなわち縄文晩期から弥生時代にかけて）という表記に微妙に修正している。

比較言語学の議論の中に、敢えて不用意に年代論を含む推測的な事象を持ち込むことの危険性は、たびたび指摘されるところである。それは、せっかくの学術的意義をかえって損なうことにもなり兼ねない。大野氏自身も言及しているように（『起源』35～36頁）、氏の日本語＝タミル語同系説について、かつてオランダのドラヴィダ言語学者 Zvelebil 教授が比較的好意的な論評を加えていたことは事実である。しかし、それはあくまでも個々の語彙及び音韻の対応のレベルにおいてであって、もしも日印間の古代の文化交流や大規模な人的移動をめぐる憶測的な議論を振り回されていたら、教授も恐らく、所説の当否について沈黙を余儀なくされていたことであろう。言語学的方法論による妥当な判断の範囲を逸脱してしまうからである。方法の厳密さを追求するのであれば、比較言語学の枠内で徹底した議論を展開すべきで、その領域内で、論陣を張るのが学問の正道ではなかろうか。

ここで、再び Zvelebil 教授の言を引用したい。彼は、日本語＝タミル語同系説をめぐる



南インドと日本(北九州)対照年表

シンポジウムに寄せた論文の締めくくりに際し、次のように戒めている——「〔……〕まさしく地理的および年代的な問題を伴うがゆえに、また歴史の上での蓋然性がないために、確実な、ゆるぎない同系性の証明を樹立するためには、比較歴史言語学の厳格な方法によってチェックされた、さらに多くの言語的証拠が必要でしょう」。⁽⁸⁵⁾的確な指摘と言うべきであろう。このことについては、大野氏も、『以前』の結論部分（334頁）で同様の趣旨を述べている——「つまり音韻の『対応』の手懸かりに研究を進めて来た私は、先の二つの問い〔＝日本とタミルが関係したのはいつのことか、その場合陸路か海路か〕には何の解答も持ち出しようがない。学問には手順がある。それらの問題は別の方法の参加によって解けるかもしれない次の宿題である」。氏はさらに言う——「しかし、行く手は多岐に分かれて遠い。いまや、一人の力で答えを確定することは困難である。私は期待したい。有能な若者たちが現れてこの研究を推進するだろうと。新しく、広い、思いがけない視野が展開するだろうと」（『以前』337頁）。ところが、こうした自戒や期待の言もものかは、『以前』から僅か7年後に発表された『起源』中で、難なく「困難」が克服され、「手順」がクリアーされ、かつ「宿題」も解かれて、後学ならぬ大野氏自身によって、新しく、広く、思いがけない「答え」が「確定」されているのである。紀元前数百年（縄文晩期～弥生期・中期）の頃、タミル人が舟によって来到した、というのがそれである（『起源』226～229、244頁）。しかし、大野氏のこの考えは、既に1990年の時点で半ば準備されていたということがわかる。同年に出版された『弥生文化と日本語』の中で、『以前』における方言圏論的構想に代わって、⁽⁸⁶⁾（縄文中期における？）舟による渡來說が強く示唆されているからである。

皮肉な物言いをしたが、このように、氏自身の議論の展開の中で、本来言語の対応をめぐる問題であったはずのものが、いつしか太古における文化要素の共通性や人的交流・民族移動の話題にまでエスカレートしている。こうした転回は、一般の関心の焦点を「言語」から引き離し、古代史・先史考古学の方面へと誘導することになる。このことにより、積年の労作である肝心の音韻対応と対応語彙表に対する査定よりも、歴史的な仮構の当否のみに氏の業績への評価が集約されてしまう結果になったならば、学問的に不幸なことであり、氏としても遺憾なことになりはしまいか。純粹に言語学的な方面に議論が収斂され、言語の照応に関しての冷静かつ客観的な評価を導き出すような形に、ご自身も議論の方向を調整されるのが、学問的にもっとも建設的な道であろう。研究成果の評価は、終始適正な方法論に則り、その限りにおいて妥当な結論に至っているか否かに、結局は掛かっていると信じるからである。そのような手続きを積み重ね、ようやく真実の全体像が浮かび上がってくるのであって、はじめから独りよがりにも見え兼ねない直観や推測の年代論を振りかざすのは、学問的には適当でないと思うのである。

氏の国語研究における研鑽と業績は、我々のような並みの研究者では到底足元にも及ばぬものであり、羨望の的ですらある。氏の学問的名声は、国語学界という狭い領域をはるかに越え、四方に轟きわたっていることは、あらためて指摘するまでもない。日本語＝タミル語に関する氏の所論は、問題点を抱えつつも、鋭い洞察力に富み、敬服に値するものを数多く含んでいる。氏の慧眼と新鮮な着想は、ドラヴィダ語の研究全体の発展にも大いに裨益し得

るであろう。それだからこそ、いたずらに専門外にもわたる批判を招かぬよう、氏は、焦ることなく、研究対象とする語彙を洗い直し、比較の質を問い質して、ご自身の対応語彙表の精度をより高め、あくまでも“言語学的”な磐石さを追求する作業に全力を集中されてはいかがでであろうか。氏の系統論の正当な評価は、後世の諸科学の進展を俟てばよいではないか。それを歴史的文脈の中で整合的に解釈し位置づける作業は、あとに続く学徒に託された大いなる課題である。

タミル語、タミル民族、タミル文化に対する愛着は、筆者も他に引けをとらないと自負している。日本語とドラヴィダ語、極東の島国の文化と酷熱の南インドのそれとが、その深みにおいて、何らかの絆で結ばれていて欲しいと心中密かに願う者であることを告白したい。将来大野博士の並々ならぬご努力が実を結び、正当かつ厳密な学問的方法を以て、日本語とタミル語、ないし日本人とタミル人の結びつきが確認されることにでもなれば、心から喜びたいと思う。

注

- (1) 『ムンダ人の農耕文化と食事文化：民族言語学的考察——インド文化・稲作文化・照葉樹林文化——』日文研叢書8、国際日本文化研究センター、1995年。
- (2) 上記注(1)を参照せよ。
- (3) ただし、現代の散文学などでは、主語が文末に置かれる例も少なくない。しかし、その場合でも、それ以外の部分は日本語とほとんど同様の語順をとる。
- (4) *L'inde classique : manuel des études indiennes*. tome I, Paris, 1947, § 190 (翻訳：山本智教訳『インド学大事典』第1巻、金花舎、1981年、101頁)。
- (5) 前掲 *L'inde classique*, § 190 (『インド学大事典』101頁)。
- (6) Rajam, *A Reference Grammar of Classical Tamil Poetry (150B. C. —pre-fifth/sixth century A. D.)*, Philadelphia, 1992, p. 388f.
- (7) Cf. *Tamil Lexicon*, Madras, 1936, p. 3593.
- (8) 例文：‘nin tāriṇvāyk koṇṭu muyaṅki’「汝の花環でつかんで抱き…」(*kali*. 95)。
- (9) 『以前』262頁。
- (10) 『以前』249頁参照。
- (11) Cf. U. Vē. Cāminātaiyar, *Puraṇānūru Mūlamum Uraiṇum*, Tañcāvūr, 1985, p. 218; Auvai Cu. Turaicāmp Pillai, *Puraṇānūru (1-200 Pāṭṭukkal)*, Ceṇṇai, 1977, p. 239f.
- (12) U. Vē. Cāminātaiyar, *Pattuppāṭṭu Mūlamum Nacciṇārkkīṇiyaruraiṇum*, Tañcāvūr, 1986, pp. 133, 154; Po. Vē. Cōmacuntaraṇār, *Pattuppāṭṭu Mūlamum Uraiṇum [Mutar Pakuti]*, Ceṇṇai, 1976, p. 27. ただし、両者とも、「蜜を花々が自らのもとから滴らせている……」と解している。
- (13) 大野氏の表記では“uraikkum”とあるが、“urāikkum”の誤りである。従って、ここでは表記を正しく改めておいた。
- (14) U. Vē. Cāminātaiyar, *Paripāṭal Mūlamum Parimēlaḷ akaruraiṇum*, Ceṇṇai, 1980, p. 177f.; Po. Vē. Cōmacuntaraṇār, *Paripāṭal Mūlamum Uraiṇum*, Ceṇṇai, 1975, p. 277.

- (15) *Pari*. 17 の 30~31 行目に当たる。
- (16) F. Gros, *Le Paripāṭal : Texte tamoule*, Pondichéry, 1968, p. 112f.
- (17) U. Vē. Cāminātaiyar, *op. cit.*, p. 177.
- (18) 『以前』においては、「ぞ」と“tān”の問題は扱われていない。
- (19) 『以前』においては、この問題は取り上げられていない。
- (20) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』岩波書店、1974年、335頁。さらに同1447~1448頁も参照。
- (21) 『岩波古語辞典』338頁。
- (22) Winslow, *A Comprehensive Tamil and English Dictionary*, first published 1862, p. 291.
- (23) S. Visvanatha Pillai, *A Tamil-English Dictionary*, eighth edition, Madras, 1972, p. 238.
- (24) Mousset et Dupuis, *Dictionnaire Tamoul-Français*, New Delhi, 1981, tome un, p. 432.
- (25) なお、ポリネシア語の音韻的な特徴に関する大野氏の理解については、シンポジウムにおいて、長田氏から疑問が投げられたことを付記しておきたい。なお大野氏は、『起源』244頁では、ポリネシア語族の代わりに、オーストロネシア語族の語を用いている。
- (26) Rajam, *op. cit.*, p. 359f.
- (27) Winslow, *op. cit.*, p. 292.
- (28) これは、家本氏の指摘する、古代タミル語における「品詞性の薄さ」とも関連している。同じ語が、多くの品詞にわたって用いられるのである。
- (29) S. V. Subramanian, *Grammar of AkanānūRu with Index*, Trivandrum, 1972, pp. 125, 262.
- (30) Subramanian, *op. cit.*, p. 125.
- (31) Cf. *Tamil Lexicon*, p. 890.
- (32) Puliyūr Kēcikan, *Akanānūru : Maṇimiṭai Pavaḷam*, Cennai, 1960, p. 109.
- (33) Po. Vē. Cōmacuntaraṇār, *Akanānūru Maṇimiṭaipavaḷam Nittilakkōvai* [*Ceyyutkal* : 121-400], Cennai, 1977, p. 147f.
- (34) U. Vē. Cāminātaiyar, *Kuruntokai*, Aṇṇāmalainakar, 1983, p. 568.
- (35) Mu. Caṇmukam Pillai, *Kuruntokai Mūlamum Uraiyum*, Tañcāvūr, 1985, p. 243f.
- (36) 氏は、『起源』54頁において、日本語「から」は、タミルの“kal”の後に“-a”を加えて成立した旨を述べている。
- (37) Cf. R. Caldwell, *A Comparative Grammar of the Dravidian or South Indian Family of Languages*, (reprint) New Delhi, 1974, pp. 283~286 ; S. V. Shanmugam, *Dravidian Nouns : A Comparative Study*, Annamalaiagar, 1971, p. 384 ; K. V. Zvelebil, *Dravidian Linguistics : An Introduction*, Pondicherry, 1990, p. 22f.
- (38) Rajam, *op. cit.*, pp. 321~328.
- (39) 大野氏が「む」に当たるとしている“um”は、動詞の inflectional ending であり、やはり“in”とはまったく範疇を異にしている。
- (40) 日本語「も」「と」と、タミル“um”の類型論的な対応については、V. N. Balambal, *Japanese Language through a Tamil-eye*, Madras, 1988, pp. 26-32 にも詳しい指摘がある。タミル語を少しでも学んだ日本人、もしくは日本語を学んだタミル人であれば、誰でもが気づく類似である。
- (41) H. A. Jäschke, *A Tibetan-English Dictionary with Special Reference to the Prevailing Dialects*, London, 1881, pp. 6, 505 ; Chandra Das, *Tibetan-English Dictionary*, Kyoto, 1969,

pp. 38, 1125; 芳村修基編『チベット語字典』、法蔵館、1975年、12、825～826頁。

(42) Rajam, *op. cit.*, pp. 343～348.

(43) Rajam, *op. cit.*, p. 307.

(44) 現代語でも、例えば“maram” (木) は accusative で “marattai” (=marattu+ai) となる。

(45) 『岩波古語辞典』1442～1443頁も参照。

(46) DEDR 7; 『以前』262頁。

(47) さらに、『起源』167～168頁、『以前』154～155頁、大野晋・小沢重男・佐々木高明・大林太良・佐原真他『シンポジウム・弥生文化と日本語』角川書店、1990年、40～41頁でも、タミル“paṭam”と日本語“Fata”に絞って同様の趣旨で考察が為されている。

(48) Cf. *Tamil Lexicon*, lvii.

(49) さらに、そうしてアーリヤ化を経た語彙の多くが、今度はドラヴィダ語圏などに逆輸入 (再借用) された可能性も想定できよう。

(50) F. Hardy, *Viraha-bhakti: the Early History of Kṛṣṇa Devotion in South India*, Delhi, 1983; 拙論“Some Remarks on Tirumāl/Viṣṇu Cult in Early Tamil Religion and Literature: with Special Reference to the Tirumāl Odes of the *Paripāṭal*”, 『東洋文化研究所紀要』、第126冊、1995年1月、pp. 73～157.

(51) E.g. P. T. Srinivas Iyengar, *History of the Tamils: from the Earliest Times to 600 AD*, Madras, 1929, p. 84; K. K. Pillay, *op. cit.*, p. 78.

(52) N. Subrahmanian, *Pre-Pallavan Tamil Index*, Madras, 1990.

(53) *Index des mots de la littérature tamoule ancienne*, 3 vols., Pondichéry, 1967-1970.

(54) DED, xviii; DEDR, xix.

(55) なお、大野晋「日本語とタミル語の関係(23)」(『国文学解釈と鑑賞』第49巻第13号、1984年11月、178～179頁)では、“kucci”と“kuccu”を区別なく扱っている。

(56) *Tamil Lexicon*, p. 3838.

(57) 『起源』「日本語とタミル語の対応語一覧」15頁。

(58) Auvai Cu. Turaicāmpī Piḷḷai, *Puranānūru (1-200 Pāṭṭukkaḷ)*, Cennai, 1977, p. 221f.

(59) S. V. Subramanian, *Descriptive Grammar of Cilappatikāram*, 発行地・発行年不詳。

(60) U. Vē. Cāminātaiyar, *Iḷāṅkō, vaṭikaḷarūḷicceyṭa Cilappatikāra Mūlamum Arumpatavuraiyum Aṭiyārkkunallāruyaiyum*, Tañcāvūr, 1985, pp. 140, 159, 705.

(61) Po. Vē. Cōmacuntaraṇār *Aciriyar Iḷāṅkōvaṭikaḷ Iyarriyaruḷiya Cilappatikāram*, Cennai, 1983, p. 183.

(62) Cōmacuntaraṇār, *op. cit.*, p. 184.

(63) 大野晋「日本語とタミル語の関係(13)」(『国文学解釈と鑑賞』第49巻第1号、1984年1月、220頁)。氏は問題の箇所を「192番96行」とするが、「192～196行」が正しい。

(64) U. Vē. Cāminātaiyar ed., *Aiṅkurunūru Mūlamum Paḷaiyavuraiyum*, Cennai, 1980, p. 123.

(65) Po. Vē. Cōmacuntaraṇār, *Akanānūru Maṇimīṭai Pavaḷam*, Cennai, 1976, p. 32.

(66) U. Vē. Cāminātaiyar ed., *Patirruppattu Mūlamum Paḷaiya Uraiym*, Cennai, 1980, p. 146; Auvai Cu. Turaicāmpīḷḷai ed., *Patirruppattu Mūlamum Viḷakka Uraiym*, Cennai, 1973, p. 266.

(67) インドの食文化に関しては東北大学大学院文化人類学科・山下信子氏の教示による。

(68) K. K. Pillay, *A Social History of the Tamils*, Madras, 1975, p. 351.

- (69) Pillay, *op. cit.*, p. 330.
- (70) 杉本良男編『伝統宗教と知識』所収、同氏「アンチ・ブラーフマン——タミル・ナードゥのカースト制と権力——」、110、116頁を参照。
- (71) *DED*, xviii; *DEDR*, xix.
- (72) Cf. *DEDR*, xix.
- (73) *Tamil Lexicon*, xxvii.
- (74) *Tamil Lexicon*, lx.
- (75) Cf. *DED*, xx; *DEDR*, xxi.
- (76) *Tamil Lexicon*, lx.
- (77) Cf. *DED*, xx; *DEDR*, xxi.
- (78) 『シンポジウム・弥生文化と日本語』177頁。ただし同氏は、他の著書において、大野氏の掲げる対応語の中に明らかに問題になるものがあることも指摘している (*Zvelebil, Dravidian Linguistics: An Introduction*, p. 120f.)。
- (79) K. V. Zvelebil, *Tamil Literature*, Leiden/Köln, 1975, pp. 9, 173.
- (80) 同様の図は同233頁にもあるが、両者の間に「サンガム時代」の終わりの年代に関して不整合が見られる。どちらか一方に統一してもらいたいものである。狭義のサンガム文学の年代は、紀元前1世紀（もしくは紀元後1世紀）から紀元後3世紀というところであろう。いずれにせよ、氏のサンガム時代の理解は、古く偏り過ぎている嫌いがある。Zvelebil 教授（『弥生文化と日本語』176頁）も指摘する *Tolkāppiyam* の年代設定の古さといい、タミル系学者の意見に引きずられて、氏は絶対年代を古く見積もる傾向があるが、年代論の議論に持ち込むのであれば、タミル文学史のクロノロジーに今少し注意深くあって欲しいものである。
- 『起源』114頁の図の「言語の対応」の中に掲げられている「③係り結び」については、大野晋『係結びの研究』（岩波書店、1993年、365～366頁）において、タミル語との関連が指摘され、さらに『起源』53～58頁でも触れられている。一連の議論において、“kol”に関わるものについては概ね正しいとしても、いわゆる連体形終止に似た現象や主語が文末に現われることは、現代語に至るまで頻出する現象であって、その場合助辞（助詞）を伴わないことも多いことに留意すべきである。また「④五七五七七の形式」については、大野氏は『起源』63～77頁の中で、音節の数だけを考慮した議論に終始しており、古代タミルの韻律が長短が基本になって構成されている事実まったく顧慮が払われていない。二つの *cīr*（韻律単位）を合わせて5音節ないし7音節の纏まりを設けることについても、「意味の纏まり」と述べるだけで、納得のいく根拠が示されておらず、これだけを以て日本の和歌との（類型的ではなく恐らく起源的な）一致を論ずるのは無理ではあるまいか。
- (81) さらに、氏はサンガム文学と称しながら、時代の降る諸本も区別なく扱っている傾きがある。狭義のサンガム文学とそれ以外のもの（例えば、*Paripāṭal*、*Tirumurukārruppaṭai*、*Kalittokai*、*Cilappatikāram*、*Maṇimēkalai*、*Tirukkuraḷ* など）とは成立年代にもギャップがあり、注意深く扱われるべきである。氏はサンガムを2500首（正確には2381首）から成るものと規定しているが（『起源』17頁）、その場合は *Ettuttokai* と *Pattuppāṭṭu* を指しており、先の *Cilappatikāram*、*Maṇimēkalai*、*Tirukkuraḷ* 等は含まれないと理解される。
- (82) 『弥生文化と日本語』105頁。
- (83) 前掲書、105頁。
- (84) K. V. Zvelebil, “Tamil and Japanese——Are They Related? The Hypothesis of Susumu

Ohno”, *BSOAS*, XLVIII, 1, 1985.

(85) 傍線（下線）は Zvelebil. 前掲『弥生文化と日本語』182頁、下宮忠雄訳。

(86) 『弥生文化と日本語』43～49頁。

[附表]

以下に掲げるいくつかの表は、『起源』中に見られる疑問点を纏めたものである。

①『起源』の本文中に見出される誤植ないし誤記と考えられるタミル語表記である。網羅的なものではないが、参考までに掲げておく。

ページ	行	誤	正
55	3	makal	makaḷ
55	10	vālkkai	vālkkai（または vārkkai）
56	8	makal	makaḷ
56	15	evan	evan*
71	12	Nāyiru	Ñāyiru
71	12	vānattu	vāṇattu
74	15	viṭuvānō	viṭuvānō
75	15	Tirukural	Tirukkuraḷ
76	4	Tirukural	Tirukkuraḷ
76	8	Tirukural	Tirukkuraḷ
98	7	Aiñk.	Aiñk.
98	13	Perumpān.	Perumpāṇ.
99	3	Perumpān.	Perumpāṇ.
99	10	Perumpān.	Perumpāṇ.
138	12	Pañcaṇaṇa	Pañcāṇaṇa
181	6	Mullaipāṭṭu	Mullaippāṭṭu
211	15	Kuriñoi.	Kuṛiñci.
228	8	ten	ten
238	(表)	appaci	appacci
238	(表)	annai	aṇṇai
238	(表)	manaiyal	maṇaiyāḷ
238	(表)	erkho	erkhō または erkhos

* 大野氏は、この箇所（『起源』56頁）で、*Akanānūru* 108 から文例を引用するに当たって、“Evan kol iruḷ iṭai tamiyan varu tal” と表記しているが、原文では “kol” の語と “iruḷ” の語の間に7行半ほどの間隔があり、引用のやり方としては不適當である。

②同書の巻末「日本語とタミル語の対応語一覧」における正誤表

ページ	誤	正
2	petai	peṭai
2	mell	melli
3	kaṭama	kaṭamā または kaṭaman
7	muṭu	mūṭu
11	tiṅkal	tiṅkaḷ
13	paṭuvan	paṭuvaṇ
16	nūval	nuval
16	makiti	maṭiṭi
16	maccukkaṭṭi	maccukkatti
17	miṛi	viṛi
17	mi	mī
17	melliyal	melliyar

③以下は、同書巻末の「日本語とタミル語の対応語一覧」の中で、タミル語の語義の提示に問題があると見做されるものを示したものである（ただし網羅的なものではない）。語義が誤っているものもあり、また *DED-DEDR* の当該項目からの語義の選択とその訳語表現が恣意的に映るものもある。紙幅の関係から、問題点を一々説明することは控え、それらの語と問題の語義（特に下線部分）のみを掲げる（頁数は一覧表のもの）。また、「対応語一覧」中にはインド・アーリヤ起源が疑われるものも数多く見出されるが、これらについては割愛する。

ページ	問題の語と語義
3	kacaṭu（滓）
3	kaṭai（門・入口）
3	kaṭal（海・ <u>浅瀬</u> ）
3	kavar（河）
3	kaḷi（粥）
3	kaḷai（刈る）
3	kāl（親族）
4	kōmān（ <u>超能力をもつ者</u> ・王）
4	kuḷir（ <u>寒さでかがまる</u> ）
5	ōṅku（あげる）
6	cūrai（強奪する）
6	cuval（肩の上部）

ページ	問題の語と語義
7	teḷi (白くなる)
7	nāṭṭu (成す)
7	mūṭu (隠す)
7	maṭṭu (結ぶ・終わりになる)
11	tampal (泥の水田)
11	tavir (仮に宿る)
12	vaṇṭal (川や湖で岸を洗われている所)
12	nāṭṭu (創成する)
13	nēr (似る)
13	piṇai (ひねる)
13	paṭu (生む)
13	paṭi (停泊する)
13	paṭu (最初に生じる)
13	paṭukar (陸田・水田)
14	param (空) …指摘の <i>DEDR</i> 3949 に当該の語の記載なし
14	paravu (捧げ物で罪を除く)
14	paṛi (雑草を刈る)
14	paṛru (貼る)
14	pāvu (這う)
14	pokkaṇai (穴・墓穴)
14	pittai (額の髪)
14	piṇ (後背地)
14	piṇ (古い時間)
14	putai (蓋)
14	puṛai (洞穴)
15	vākku (吐く)
16	kāval (保護する)
16	maṭiṭi (負ける)
17	muci (ねじりとる)
17	muṭṭu (ゲンコツで打つ)
17	muḷ (銛)
17	mūtu (かたびらでつつむ)
17	amiṛ (浴びる)
17	im (墓地・不浄の地)

ページ	問題の語と語義
18	ācu (やせる)
18	aṇai (やな) (魚をとる設備)
18	ār (槍)
18	ār (身につける鎧)
20	vaṭam (輪)
20	vaṇṭal (川や湖で岸を洗われている所)
20	vaṛal (乾いた小枝や草)